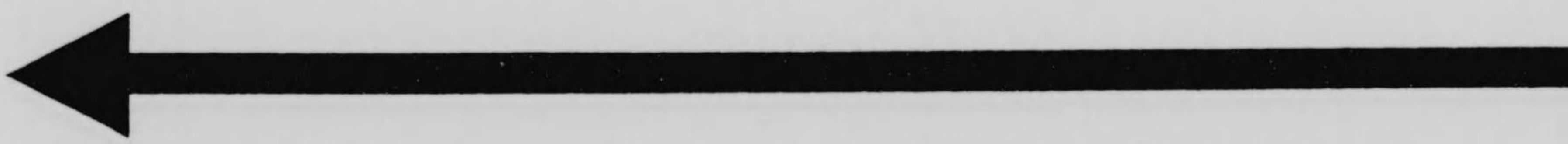


360
498



始





現代
農村青年の行路

死に類せる農

村の土も本書

に依て復活せ

ん來れ、讀め、

横田英夫先生序
宇根義人先生著

360-498

序 自 村 農

自序

精神物質兩面の生活難は、現代の我が農村青年の行手に横たはつて、殆んど其の行路を遮るの狀態である。如何にして我等農村青年は其の行路を開拓すべし乎、これ現代農村青年の最大問題とする事實である。

本書の主意は別に之に摘記したれば此處にこれを云はず、たゞ農村青年諸君の回響として、相談相手となり、共に手をとつて起ち、伴に歩まんとする予の意志表白の第一歩として、予は本書を書くに至つたのである。

自は正に暮れて未だ月光を見ず、益々闇黒に沈まんとして路また既に盡きんとするが如き我農村青年の行路に方つて、一個の蠟燭となり、一星の微光とだもならば予の幸とする所、希くは健全なる我が農村青年諸君が人類とし、國民とし、個人とし、農村青年として眞の行路に歩を進むるに當つて、予が本書に

大正
5. 10 4
内交

載する所を取り、例へ草鞋一足の役になりと立たしめられんことを。
尚、我邦に於ける最も真執なる農村研究者たり、又た、其の先覺者たる横田
英夫氏、親しく筆を執つて本書の爲めに熱意に満てる序を與へられたることは、
予の深く徳とする所、此處に記して謹んで謝意を表す。

大正五年初秋

帝都郊外の田園に於いて

著 者 義 人 識

序

進んで都會に出でんとすれば、虚榮成功の浮熱に胃さるゝものとして難せられ、
退いて農村に留まらんとすれば、生活難と精神生活の荒寥とに堪え難からんとす。
現代の農村青年の境遇は正しく出づること能はず、居ること難しと云ふ進退兩難に
陥つたものである。元來、人間は到底所謂香味なき生活に沈淪するとすれば、其の人は動々
することも出来ぬ。若し人間が全く希望なき生活に沈淪するとすれば、其の人は動々
もすれば生活の絶望者となるもので、人生の危機これより甚だしきはない。況んや
夫れが燃ゆるが如き青春の血を通はし、積極不斷の力を藏する青年時代に於てをや
である。物質生活の窮苦と精神生活の荒寥との爲めに虐げられつゝある現代の農村
青年は、今や斯くの如き危機に瀕してゐるではあるまい乎。恐らく現代の農村青年
多数は、此の苦悶を脱せんとして己み難きものがあるであらう。青年を愛する人、

青年を敬する人、青年を重んずる人は、速に起つて困惑せる現代の農村青年に、正しくして然も意義ある生活の針路を示さなければなるまい。

又一面より之れを観る。云ふまでもなく青年は新らしき時代の國民であるから、國家の興亡盛衰は一に懸つて青年の肩にある。然るに今日、來るべき時代の國民の中堅たるべき農村青年が、滔々として生活の絶望者たらんとしつゝあるは、即ちやがて我國の中堅勢力が頼れんとしつゝあるもので、國家に取つて深憂之れに過ぎたるはない。私は農村を見聞し進退兩難の境遇に陥れる青年の心事を想察して、國家の將來に對する沖々の憂を新にするを禁じ得ない。國家を愛する士、國家の將來を念ふ士、國家の前途を憂ふる士は、宜しく起つて此の新國民を生活の絶望から救はなければなるまい。私は農村問題に就いて常に深い注意と憂慮とを有してゐるものであるが、單に農村問題の解決と云ふ點から觀ても、農村問題としての最後の努力は、如何にして農村青年と現在の物質的生活難、精神的生活難から救ふべき乎に

あるを痛切に感じてゐる。
然らば如何にして現代の農村青年を救ふべき乎、救ふと云ふに語弊があるならば如何にして意義ある生活の立脚地を與ふべき乎、之れは實に大なる問題であつて、素より私が此の序文などで取扱ふべき問題ではない。然しながら今一言にして私の觀る所を盡せば、先づ農村青年に確乎たる生活の立脚地を與ふると同時に、人生々々の立脚地を確立するに足るだけの物質上の餘地があるかどうかは、別問題として更に研究する必要があるが、さればと云つて都會の事情が、更に明白に多數の農村青年の無成算なる集中を許さないとすれば、先づ現代の農村青年は或る程度までは、郷土たる農村に於て安全なる生活の立脚地を拓き、以て内實的に生活の充實を期するより外はない、生活の充實と云ふことは、決して外張的にのみ求められるものではなくて、却つて内實的に求むる方が有意義である。加之ならず、物質文明の弊が

農村青年の生活の充實を期するに足るだけの物質上の餘地があるかどうかは、別問題として更に研究する必要があるが、さればと云つて都會の事情が、更に明白に多數の農村青年の無成算なる集中を許さないとすれば、先づ現代の農村青年は或る程度までは、郷土たる農村に於て安全なる生活の立脚地を拓き、以て内實的に生活の充實を期するより外はない、生活の充實と云ふことは、決して外張的にのみ求められるものではなくて、却つて内實的に求むる方が有意義である。加之ならず、物質文明の弊が

著るしい現代に於ては、生活の立脚地を確立するには、生活の意義を自覺することが最も必要條件であると云ふことは、我々の深く心銘すべきことではあるまい乎。斯う云つたからと云つて私は農村青年に求むるに、徒らに「勞働は神聖なり」とか、又は「農業は天職なり、農民は幸福なり」とかなどと云ふ格言めいた言葉を楯に取つて、近代生活の根柢に喰込んで来た經濟力を無視する道學者や文人の口吻を眞似やうとするものではない。私は現代の農村青年に對して夫れほど冷酷でもなければ又夫れほど所謂先輩顔をしたくない。

幸に農村青年の如上の苦悶も一般識者の看取する所となつて、流石に種々な指導的言論や方法等が試みられて来た。之れは實に喜ぶべきことではあるが、私の觀る所を以てすれば、農村青年の皮肉を貫いて直ちに其の肺腑に入るやうなものがない。其の多くは無暗に先輩振るか、然らずんば徒らに道學臭味に囚はれた人々で、徒らに古典の訓話を以て新青年を縛らうとする枯淡無味の修養談である。偶々農村青年

の新苦悶、新要求を解して激勵感動せしむるものがあるかと思へば、夫れは多くは餘りに急進激越に奔つて、着實味を缺いた青年を過つて浮薄趨炎の徒たらしむる外道に陥る傾がある。舊殻に囚はれたる修養は感激する所なく、従つて現に生活の盡路に迷ひつゝある農村青年に對して、現實的に生活の立脚地を開拓せしむる力を與へない。前にも述べた如く、物質的生活の窮苦、精神生活の荒寥に虐げられつゝある現代の農村青年に對しては、修養を説くに生活の新味を以てし、奮闘を教ふるに内省自覺を以てしなればならぬ。何となれば現代の農村青年は、其の夢想する都會生活などと比倫し難き物質生活の窮苦を感じてゐるから、先づ生活に對する正しき解釋と意義とを與へる必要がある。又農村青年は堪え難き精神生活の荒寥を感じてゐるから、先づ饒多なる趣味と健全なる人生觀を與へる必要がある。斯くして行盡したる生活の現狀を打開し、農村青年自身をして正しき新生活の針路を發見せしめなければならぬ。故に之れを説くは冷酷な先輩顔をする人々の能くし得る所で

ない。能く農村青年に親炙して其の心理を理解し、同時に處世保身の道に就いて能く一見識を有し、然も農村青年の同情者にして始めて能くし得る任であると思ふ。宇根君は私と同郷の人で、未だ三十に満たざる實踐躬行の士である。自ら世の境遇に於て現代農村青年の苦悶を體理心得したる點に於て、又殆んど全國の農村を踏破視察して、能く農村青年の心理と實際とに觀到したる點に於て、更に又出郷以來具に辛酸を嘗めて處世の要領を會解したる點に於て、更に又少時より催眠術に曉達して心靈上の素養ある點に於て、現代農村青年の同情者となり、指導者となることに於て最も適當の人たるを覺える。君今感ずる所あり、親しく筆を執つて本書を著はし、題して『現代農村青年の行路』と爲すと云ふ。私は君から其の内容の大意を聞き、君の爲人を思ふで能く人と書の所を得たるを喜ぶの情に堪えない。時恰も私の一身が匆卒の際であつた爲めに、遺憾ながら本書の内容を讀むことが出来なかつたが、斯人にして斯著あらば、恐らくは言々悉く農村青年の爲めに好箇の師友たる

べきを疑はず、喜んで之れを世に薦むるものである。即ち一言を陳べて君の書の序に冠する所以。

あゝ、五百萬の敬愛すべき農村青年、今や虐げられて浪々たる精神的無籍者たらんとす、現代農村青年の行路や夫れ何處乎、宇根君の説く所の『現代農村青年の行路』之れ實に我國將來の危機を未然に回さんとする大なる使命ではあるまい乎。私は宇根君の觀る所を廣く世に問ふて、現代農村青年の行路と云ふことが、更に普く反省、自覺、解決の題目とならんことを希ふものである。

大正五年初秋

横田英夫

農村青年の行路目次

緒 言.....1

□農村問題の根本的研究

農村の現在は病者である.....六

農村疾病の原因.....八

農家の惨状斯くの如し.....一〇

同情すべき農村の青年.....一二

自覚せよ農村の青年諸君.....一四

農業の尊重すべき理由.....一六

諸君よ誤解する勿れ.....一九

□農村と都會

農村青年と都會……………二二

農村と都會との差異……………二五

新聞雜誌廣告の裏面……………三一

斯んな事實もある……………三三

農村青年の弱點……………四〇

先づ郷里に成功を謀れ……………四二

□農村青年と文學

文學志望青年に告ぐ……………四九

都會に大人物は出ない……………五三

文學者の觀た農村……………壹

□農村青年の立場

その充實と發展策……………六四

自然は大なる寶庫……………六六

農村と時間の餘力……………七〇

境遇を支配せねばならぬ……………七三

物品の餘力とその利用……………七六

時所位に眼覺めよ……………七九

□農村青年と教育

農民には學問は要らぬか……………八四

農業は學理の實現……………八六

程度問題がある……………八八

目的を忘れてはならぬ……………九〇

天然自然に學べ……………九二

□時代と農村青年

現代の我が農村……………九六

重大最大問題……………九九

静思熟慮を要す……………一〇一

時代に對する青年の覺悟……………一〇五

これ根本問題である……………一〇七

百姓は百姓らしく……………一一〇

手の大きい人は大きい仕事をする……………一二三

世界的の耳目を養へ……………一二五

健全なる常識が必要……………一二七

新しい報導に注意せよ……………一二九

注意する上の注意……………一三三

旅行の見聞に利を得る……………一三六

我國農民の旅行……………一三九

旅行の益ある實例……………一四三

農業上の發明が肝要……………一三七

農村青年の大奮起を要す……………一四〇

人口問題よりもこれが第一……………一四四

□農村の根本的急務

急務は甚だ多い……………一四八

他人ごとで無いことを悟れ……………一四九

起てよ我が農村青年諸君……………一五三

充分の準備が必要……………一五六

覺めたる青年が活動の實例……………一五八

自治の完成を謀れ……………一六〇

宗教に依る飛躍の模範村……………一六三

農村信仰の中心を得よ……………一七〇

神佛とは何か……………一七三

神佛の崇拜すべき理由……………一七七

附録

□農村と娯樂

我國民信仰の中心……………一七九

農村最後の問題……………一八二

娯樂の意義と性質……………一八七

農民の求むべき娯樂……………一九二

第一に此の娯樂あるを知れ……………一九五

種々なる農村の娯樂……………二〇〇

娯樂に對する二三の注意……………二〇四

目次(終)

現代農村青年の行路

宇根義人著

緒言——本書の主意

我農村は疲弊衰微と云ふ大なる缺陷を生じて、農村問題は今や我國に於ける重大問題である。而して其中心は、青年を以て問題としてゐる。云ふまでも無く、農村の死活は農村青年諸君の双肩にあればである。

其の中心の問題に持ち上げられつゝある青年、それに対して聊か云ふところあらうとする本書の主意は自から明白であらうと思ふ。然し一言を呈することとする。又その必要がある。



緒言

士農工商であつた時代は何時しか過ぎて、時勢の力は工商農の變態を生んだ。然らば、國の本と稱されてゐた我農は、國の末と成下つたのであらうか、否、依然として我帝國の農は國本である。三千五百萬の人口を有し、戸數に於て五百萬戸以上を有する帝國の農そのものは、何處までも我國本であらねばならぬ。三千五百萬の農民が餓えて、何うして強兵があらう、什うして一等國の面目が保たれやうぞ。畏れ多いことではあるが、嘗て 仁徳天皇の仰せられた如く、民の富は皇國の富である。民煙が賑ひ立つてこそ大日本帝國は萬々歳なのである。

歴史上の爲敗者は我農民に沈黙を強ひた。盲従を強要した。幸ひ維新の大業と共に四民平等を與へられたが今尙それは名許りである。御役人風を吹かせは、我農民は其前に平伏して黙々としてゐる。遠慮なく重税は賦課される。生活費はドシ／＼昂上して行く。而して我農家の多數は、それ等多くの支出に伴ふべき多くの収入を得られぬ。此處に於いてか「百姓では飯は喰はれぬ」の叫びを上げるに至つたのである。

ある。

けれども其叫びは哀れむべき窮餘の小聲であつた。知らしむ可からず主義に教養さるゝことの長かりし我農民の叫びは、營養不良の極病床に呻吟する繼子が困迷の叫びであつた。遂に多くの繼母はその耳を籍すことすらもせぬのである。偶々以前前の實母の來つて抱き上げ、美味滋養を與へんとするが如きものゝあるも、それは既に他家に再縁した實母の如く、充分の親愛を表することを社會が許さぬ。否實際農村出身者である多數の爲政者、將た學者たちは、充分の同情を有しつゝも、多年離れて在つただけにその同情は眞の同情では無い。再縁して再び實子を持つた身は、先夫の子等に對して到底熱烈なる合理の愛とはならぬのである。哀れむべきは眞我農村の諸君である。

然し乍ら、失望は禁物である。敢て自殺する必要はない。「物窮して又通す」天は自ら助くる者を助く」此の格言の存する限り、再び這上ることの出來得ない淺間山

の噴火口や、華嚴の瀧水に身を躍らせる様なことを爲す必要はない。大々的に聲を張上げて叫ばねばならぬ。叫ぶが良い、遠からず宇宙の大生命に諸君の聲は達することを信じて好い。著者の如きも及ばず乍ら大ひに勢撥する、助力する。之れ又一度の力となつて諸君を奮然たらしむる事が出来得ねばならぬと思ふ。

ところで、其聲は眞の叫び、充實せる神の聲の如きもので無からねばならぬ。知らしむ可からずと秘せられて教養された我農民は、継子のヒガミを以て眞の叫びと誤解してはならぬ。充實したる眞の叫び、徹底した眞理の聲で無からねばならぬのである。

他人を責むる者は先づ自から反省するの必要がある。自己を語らんとするもの又これと比として、自己内容の充實を極めて、後愈々聲を大にして他に向ふべしである。いでや諸君と共に我農村に於ける自己反省を充分して、大聲叱呼堂々として天下に向つて農村問題を叫び、我農村の自覺したる眞理の絶叫をやらうではないか。

これ我が帝國農村青年本來の使命であると同時に、また本書の主意であることを重ねて記して置く。

農村問題の根本的研究

□農村の現在は病者である

農村振興策だとか農村救済論だとか、或は農村發展策、または農村革命論など、云つて政治家に學者に、將た又識者等の間に熾んに論議されつゝある我農村の現在は、例へたならば病床に悶えつゝある病者であるとも云はれるであらう。一日も早く適當な良薬を盛つて其の健康を快復すべく治療の盡力を要するのである。

高等小學を卒へた許りの少年を初めとして我農村の青年たちは、「都會に出れば何にか成れる、いや都會に行けば成功することが出来る、恁んな馬鹿々々しい土堀りなどやつて草深い田舎に有爲の青年が何うして居られるものか、屹度都會へ行つて成功して見せる。」など云つて、年々歳々都會に流れ出る青少年男女は頗る多數に

上つてゐる。恰も胃腸病者が、滋養となり營養となる食物中の重要物をぞしく體外に排出して行くが如く、農村の中堅となつて今後の農村を建設して行くべき青年は斯くして都會へ——都會へ——と噴き出されてゐるのである。

斯くして農村は日に日に衰微し廢頽して行く、斯くて益々農村に於ける有形無形の田地田畑は荒廢して行く。何うしてこれが病者で無いと云はれ様、病者も病者、頗る重患者であると云はねばならぬ。

此處に於てか農村問題は今や我國上下の大問題として熾んに論議されつゝあるのであるが、或論者は曰く「罪は農村青年にある」と、どしどし都會に向つて流れ出る農村の青年、その青年に果して罪があるか？ 病者そのものである農村の罪か？ または其病者たらしめた社會の罪か？ 爲政者の罪か？ 二十年來論じられ、治療に盡しつゝある醫師の任に當る其ものは遂に未だ靈薬を與へぬのでは無いか？——何が故に我農村は斯くも重患なる病狀の慘めを見るに至つたのであらうか、何故未

だ快復の喜びを迎へ得られぬのであらうか、これ正に農村問題の根本的研究であり、
 観迷すべからざる問題中の問題である。

□農村疾病の原因

病者なる農村の原因を研究すべきことは前記の如くであるが、病原果して何處に
 かある。都會に集り來る農村の人々は云ふ、「幾ら働いても農村では飯は喰はれぬ。」
 と、これ果して詐らざる言辭であらうか、多數の論者の云ふ所に依れば「これは大
 いに疑ふべきものである、少なくとも、農村青年の都會に來るものは、たゞ都會の華
 美に憧憬し、田園生活を何の理由も無く厭ふて、華かなる都會生活を夢見、物質文
 明の潮流に驅られ、確たる目的も無く上京するのである。」と、余は寧ろ論者の言に
 疑ひを持ち、斯かる青年は寧ろ一部の少數であつて、其多數者は反つて農村では喰
 はれぬから都會へ出る——との言に信を置き度いと思ふ、そして其實際を遺憾とせ

ざるを得ないのである。

試に農村の現在を観るに、少數の地主はどしどし其産を昂めて、多數の自作農た
 る小農民の數は次第に減退しつゝある。止む無く地主より借地して耕作するが收支
 は遂に間に合はぬ、地主に對して小作米を納めれば、自己の所得は至つて僅少であ
 る。時に天災地變に依つて不作の場合に遭遇する時は、其全收を揚げて尙地主に提
 供するに足らず。遂に殘餘の自家田畑を抵當として借用證書を書かねばならぬので
 ある。これが我農民中の最多數者なわけは無いか。尙最近の統計上に表はれたる數
 字を持つてすれば、我農民の勞金は全國を通じて平均一日二十七錢と云ふ安價を示
 してゐる。平均にして尙これである、其尤も甚だしきものに至つては眞に慘憺たる
 ものであることは云ふまでも無い。

嘗て余は全國の大半を踏査中農村疲弊の實狀を見聞していさゝか驚かざるを得な
 いのであつたが、就中昨（大正四）年東北地方を漫遊中、岩手縣下の如き、板の間

の一部に設けたる藁の寢床の傍らに、鹽を添へた稗飯を家族の争ひ貪るを觀、また僅か六錢の鑄懸仕事を頼むや否やに就めて全家族の暫時議するを見て如何に彼等の生活の悲惨なるものなるかに驚歎の聲を揚げざるを得ぬのであつた。これをもつて

□農家の慘狀斯くの如し

と云ふ譯には行かぬが、少なくとも其一部を語るものとせねばならぬ。此處に於いて、余の如きは、都會に集中する農村青年を目して、農村衰微の罪青年に有りと云ふ論者に對しては信を置くを得ぬのである。否それ許りでは無く、都會に集まる農村青年に對して多大の同情を有してゐる。然し乍ら、「それではどし／＼農村青年は都會に上つて良いのか」と誤解してはならぬ。其の邊は後に其の良否を委しく説くこととする。

筆は思はず横道に走つたが、要するに「農業では飯は喰はれぬ」と云ふ事實の爲

めに農村の人々は次第に都會に集注されるのであつて、それは病狀の一兆候に過ぎぬ。農村疾病の原因は、

「何うして農村では飯も喰はれぬに至つたか。」にある。

歴史を研すれば我が大和民族は自然の與へたる農を國立の基礎として起ち、先づ第一に生活上の物資を得て其處に建國の基を築いたのであつた。次いで文武人士の勢を張るに至つて、漸く農業其もの、輕視さるゝ時代となり、知らしむべからずの主義に依つて、領主の奴隸として盲従を強ひらるるに至つた。斯くて勢ひ時代文明に遅れつゝも、それを意とする事も無く、甘じて沈黙を連續してゐた。時に俄然明治の維新となり、開國となつて、世界の文物は滔々として押寄せて來たが、其物質文明の恩恵にあづかるものは、重に商工と當局者其者であつて、農民の受くる處は實に僅少に過ぎぬのであつた。詰り沈黙に做れ、盲従に甘じてゐた我農民は、自

から進んで其恩恵を受け様とするものすら實に少なかつたのである。
斯くして我農民の多くは時代遅れとなり、其結果は資本の集注となつて、多数のものは遂に生活すら満足には行かぬの状態に成り來つたのである。
約言すれば、農村の現在を來したのは、急激なる文明の影響に應ずる能はざりしにありと云へやう。而して恰も初めて飲用せる新水に中毒して、胃腸を害せる病人の如き其病状を迎ふるに至つたのであつた。

□同情すべき農村の青年

農村青年は斯くて現在困迷裡に彷徨せざるを得ない。止まつて農村の振興に勉めんとするも、喰ふ能はずしては遂に空しく徒勞に終らん、出で、都會に活動せんとすれどこれ又多數の人々からは罪人と呼ばれ、止めると叫ばれる。沈黙して僅かの残飯を喰ふて生くべきか、死して無念を大なる神秘の中に包むべきか、噫眞に同情

すべきは我が農村青年諸君であると叫ばざるを得ないのである。

然し乍ら、既に緒言に於ても述べたるが如く、諸君は決して失望すべきで無る、諸君の行くべき道は消えても必らずしも全然無るのでは無る、諸君が辿るべき道は諸君の努力と勤勉とに依つて自由に展かれべきものである。諸君が、發展、向上、成功等の倉庫に入らんとすれば、先づ諸君は自からの手に依つて、鍵の製作を爲すべきである。其處に諸君の大なる責任がある。詰り我農村の生死は我等農村青年の負ふ處の大なる責任なるを思ひ、大なる使命を有することを悟り、大なる勇猛心を起して大々的な奮闘努力勉むべきである。即ち諸君の責任と使命とは絶大なるものであることを自覺して貫はなければならぬのである。即ち、病者の状態に在る農村そのものを活かすのは、取りも直さず國家を活かすのであつて、國家を活かすのは、延びては人類全體を活かすことになる(？)のであるが、其活かすのも殺すも諸君の掌中に在ると云ふても敢て過言ではないからである。

此處に於て余もまた

□自覺せよ農村の青年諸君

の叫びを揚げない譯には行かぬ。重ねて云ふ、農村青年諸君の責任は、斯くの如く大なるものであることを、農村の亡びる時は、やがて都會の亡びる時であつて、農村と都會との滅亡の時代は、また我國家の滅亡の時代なのである。さればである、諸君は何處までも大なる責任を感じ、大なる抱負を以て自己を信じ、また、農業其ものの如何に重にすべきものであるかを信じて、猛然として起たなければならぬのである。

然し、これが、若し百年二百年の昔時であつたとすれば、到底望んで得べからざるものであつたことは諸君も既に御承知の通りであるが、農民などには何も知らせてはならぬ、言はせることは出来ぬと云ふ主義であつたと云ふそんな野蠻時代は既に

に、夢の昔であつて、現代の御代では言論の自由も與へられてゐれば、また各個人の權利等も尊重されてあるから、如何なる農民であらうと、士百姓であらうとそんなことには少しも頓着する必要は無ゐ。たゞ要するに、諸君にそれだけの實力さへあれば申分は無ゐのである。諸君にそれだけの實力があり、また其實力に伴ふ自己を信ずる信仰さへあつたならば、社會を動かす、爲政者を動かして、諸君の發展も向上も自由自在に思ふがまゝになるのである。

諸君よ視界を大にして人類の世界を見給へ、如何なる原始的な社會にせよ、如何なる文明國の國民にせよ、一日として諸君を度外視しては其生活を連續することが出来ぬではないか、何處に食物を取らぬ人間があらう、何處に農民の努力になつた食物の供給を仰がないで生存する人類があらう、それは例外はある、或原始的の人間は天然の成熟物を取つて喰ひ、または獸や魚類などに食を得て生を保つてゐるものはあるが、然しそれはほんの一部分であつて例外に過ぎないのである。そして

如何に科學者が大發見大發明をしやうとも、人類の生活に喰物の不要な時代は來らないのでは無いか。精神科學の發達に依つて、恰度キリストの奇蹟の様に（一寸相違するものゝ）食を與へずに満腹させることが出來得ても、要するにそれはほんの一次的に過ぎない話しであつて、何時までも諸君の活動に依つて人類は生活して行かなければならぬのである。之等のことを眞に考察したならば、

□農業の尊重すべき理由

が解ると同時に、また、農村青年諸君の如何に自負すべきものであるかも自から明白するであらうと思ふ。然し、余が斯く云つたならば、少なくとも現代物質文明の甘味に酔つてゐる青年などは「なんだそんな淺薄なことを」とか——それより鐵錐を捨て、都會に成功し、自動車で飛ばし、飛行機で空中を驅けた方が良の——など云ふであらうが、それこそ淺薄の淺薄な考へに過ぎないのである。

現代の文明なるものを靜視して見給へ、人類の幸福増進策として研究に研究を重ねてゐるそのものが、人類に向つて何れだけの幸福を與へてゐるか、反つて眞の意味に於ける不幸福を與へてゐることも云はれるではないか、一例を延びたならば、太陽を神として敬ふ人間と、やれ醫者それ藥と騒ぎ立てる人間とを比較して、何方が健康であるか、何れが長壽をするか、云はずと知れたこと太陽崇拜者の健康と長壽とへ對したなら醫藥に騒ぎまはる人間の健康と生命とはてんで比較にならぬではないか、短命や不安は人類生存上關せず焉と云ふならそれ迄であるが、若し安全にして長命なのが人類の幸福であり目的でありするならば、此の點に於いても如何に農村諸君の方が幸福でありまた人類の目的に應つてゐるかが解るであらう。

また戦争の如き場合から云ふても、現時の歐洲戦争の如き大なる殘虐たることは人間歴史あつて以來未だ嘗て無かつたのでは無いか、それが皆現代文明の賜であるかと思へば、文明の力の如何に不安を増し慘狀を加へて行くことかと、轉た戰慄せ

ざるを得ないではないか、また科學上の發見で何千哩の遠方に在る人と人とが話し
 をすることが出来るとか、空中を自由に飛行することが出来るとか云つたところで、
 其力其ものは決して人間が造つたのでは無い、大宇宙の自然が設備して置いた力そ
 のものを、人間が漸く利用する様になつたのである、自然力を利用すると云へば立
 派でもあるが、今まで鳥にすら人間の力は及ばなかつたと云へば實に憐れむべき慘
 めなものでは無いか。

それよりも、自然力の實現を古來から實行してゐるのが農業そのものであると思
 ふと、其處にも非常な農業そのもの、尊の理由が發見されて、世界の凡ての帝王とか
 大文豪の様な人々が農業を行ひ、或は最後に至つては農民と成ると云ふことなどが
 肯かれ、嗚呼——と思はず膝を打つて愈々農業そのもの、尊重すべきものであると
 云ふことを痛切に感ぜざるを得ないであらふ。

此處で一言しておくことがある。それは前に余の述べた、現代文明觀と云ふ様な

ことを、早飲込みして誤解されると困るからである、然し、余一人が曲解してゐるの
 だと思ふ者に對しては余は何等の苦痛も何物も無いが、若しそうではなく
 『では文明なんてものはネツカラ詰ら無いものだ、それではこれも文明とかの生
 んだものだと云ふからこんなカリンサン肥料なんて用は無の方が良い』また『それ
 なら凡てのものを悉く捨て、了つて原始的の人間に歸つた方が良のか』
 など、誤解されてはそれこそ余は大罪人であり、また人類に大なる不幸を來させ
 ることになるから、

□諸君よ誤解する勿れ

と此處に警告しておかねばならぬのである、人類は一時も止まる無く、常に進化
 しつゝあつて、その進化すると云ふことは、恰度諸君が種子を蒔けば、それが自然
 に生育すると同様、人類の進化と云ふことは、それ自身が自然の與へた一種の勢力な

のであるから、これを抑へると云ふことは絶對にあつてはならぬことなのである。詰り、絶えず新を追求して行くと云ふことは、人類の自然性であり、必然的なことなのであるから、それは何處までも延ばして行かなければならぬのである。

其處には大なる矛盾がある様に思はれるかも知れぬが、決してそれは矛盾ではない、極めて自然的なのである。之等のことに關しては尙委しく述べたいのであるけれど、斯かる縁遠のことは抜きにして、もつと切實に我々農村青年に尤も必要なことを少しも多く述べることに致さう。

切實なことを云へば、喰ふか喰はぬかが第一問題であるから、我々農村青年は、こんな喰はれ相にも無の農村にあるよりも、急いで都會へ出て生活の道を求めて行かねばならぬ、何うも、それ程我々の農業が尊のものであり我々農村青年の責任が大であつてまた使命が重のとは云ふものゝ、扱て何うしたならば良のであらうか？ と迷ふ諸君も多いであらう、また従つて都會に出る方が得策と思はるゝ諸君も多いこ

と、思はれるゆへ、事實上都會に出た方が良いか、また止まつて天與の責任を全ふし使命を果たした方が良いかと云ふ、即ち現代の一大問題とされてゐる、農村青年の都會集注に就つて述べて見よう。

農村と都會

□農村青年と都會

此の問題に就ては、多くの學者或は爲政家と云ふ様な人々はまだ從來の知らしむべからず主義に依るものか何うかは知らぬが、農村青年に對して誤つた教訓とか通信とかをして居る人々があると思ふ。それは、諸君に向つては成るべく都會の善美なる點は知らせ無くて、可成的惡の方面のこと許りを書きたたり説きたたりしてゐるからであるが、少なくとも余の如きはそれを好まぬ、善惡美醜共に示し共に語つてそして諸君の一考を煩はさうと思ふ。

それは扱置ぎ農村青年諸君が年々都會に上ると云ふことに就ては余は敢て何處までも止め給へと云ふのでは無いが、先づ以て都會は純なる感情を有し善人なる農

村青年の出で、生活する場所としては、餘りに不適當な場所であることを云はない譯には行かぬ、何故かと云ふに、第一悠長に做れた諸君の心身は、繁忙であり、生存競争の豫想以上に激しい、都會は諸君を納れべく餘りに激烈である。單調な農村の人性に對して、過度な複雑に包まれてゐるのは都會である。或部分に於てはそれは良ゝることが無ゝでは無い、春に種子を蒔いて秋の成熟を待つ様な氣長なことを行らずとも、其日々の勞働なり勤務なりに於て、直ちに相應な報酬を得られる。そして直ぐに好む處の芝居になり活動寫眞になり、或は五色の酒になり、義太夫なり浪花節なり其他何處へなり、何の様な娛樂でも思ふがまゝに行かれる。それも自からテクツて行く必要も無く、金さへ出せば人俵もある、電車もある、自動車もある、或は二頭立の貴公子然たる馬車もあると云ふ具合で、直ぐに望む處へ思ふがまゝに運んで行つて呉れもする。そう云ふ次第で働けば直ぐに金を得られて欲するまゝに楽しむことが出来る様である。

然しそれが中々六ヶ敷るのであつて、此の世をば我世とぞ思ふ——と云つたのは嘗て日本に一人藤原氏があつた許りで、世界何れの國にもそんなことを云つた人間すら居ない位のであるから、實際思ふ様には行かぬのである。第一働けば金になるには決つてゐるが、職業よりも人の多い現代我國の都會にあつては、其働く口を見付けるに於て既に大なる困難を感じるのである。情に深む人々の農村であつたならば、『私は斯様くで仕事が無くつて困りました。仕事が無るので喰ふことが出来ないで困りますから何なり何うか使つて下さい。』と云つて少し富んだ家へでも行つて頼んだなら、例へそれが見えず知らずの者にせよ『オ、そうかそれは實際困るでせうまあ仕事はせんでも良むから、兎に角飯を喰ふが良からう。』と云つて、直ぐに仕事よりも飯の方を與へて呉れるのが普通であるが、其處へ行くと流石は人情紙よりも薄むと云ふ都會である、多くの場合其頼みを聞き入れて呉れない許りか、時に『ウルサイツ、そんなことを一々聞いて居ると此方が喰へ無むぢやないか、早く去け行

げ。』と追ひ拂つて寄付けもせぬと云ふのが普通である。否實際そんなことに一々取合つて居ると自からの食に窮することになるのが多くの場合事實と云はねばならぬ状態なのだからである。

□農村と都會との差異

は斯うした一事に關してすらそれ程に激しいのである。大道を歩むのさへも一時も安々と歩めない。自動車は飛んで来る、馬車は走つて来る。自轉車は飛ばして来る。電車は驅せて来る。其外荷馬車、荷車、尙お祭りの様に、どやくと澤山の人々は前から後からも引切無しにやつて来る。一寸一足でも間違ふと、『オイなんだ田舎者の人の足を踏みやがつて氣を付ける、べらんめえ。』と云ひ乍ら、横髪をホカリーと毟られる位のはまだく氣の早い方では無るので、氣の早い奴となると、何とも云はん中にボカリと毟る奴があるが、それより激しいのになると電車にでも

墜かれたなら、一とつ外無の命まで危険ないことになる。實に危険なところではないかと云ひ度くなる。

汽車から、或は電車から降りた場合、で無くとも只歩めてゐた時など、「兄さん何處其處までお安く参りませう。」など、俾夫などから呼ばれると、「ハ、ア俺れの行く先きを知つてゐるな、そうだ歩めてゐても危険だから寧ろ一寸乗つて行かうか、行く先きまでも知つてゐる位だから屹度親切人だ、よし乗れ。」などと乗つて了つたらまた大變だ、此の奴の今行かうと思つてゐる處は彼處だ——などと行く先きまでも知る位な猾るのであるから、好い加減に誤魔かして大變な處へ連れて行つて了ふ。そして種々なる策略で金を巻き上げる位なことは、他の悪人と組んでゐるものゝ多る彼等にあつては、朝飯前の諸君の芋堀ほども思つては居ないと云ひ度い位である。

一寸宿屋へ泊つても然うである。「俺はナニまだ金があるから大丈夫だ」などと田

舎に居た時分の様に思つて鷹揚に構へてゐるとトンデも無ることになる。此の家位ゐでは精々五十銭か八十銭で済むたらう、御一泊五十銭、四十銭、泊許り二十五銭の大勉強などと看板に出てゐた位だから——と安心してゐると、思ひがけない法外な金を朝になつて請求される。そんな筈はないと騒いで見たところで既に遅い、泣く泣く高價な宿料の支拂ひを止む無くさせられると云ふ様な次第、これ等のことはほんの一部であり、至極やさしい部類の事であつて、都會の裏面、都會に行はれてゐる罪惡を一々數へ立てたならば、恐らく農村青年諸君の想像も及ばぬ闇黒面の事實は殆んど驚歎に堪え無る程多るのである。

斯く云ふたところで、それでは余は農村青年の爲めにたゞ都會の恐るべき場所であることを告げて諸君に恐怖心を起こさせるのかと誤解されては困る。勇氣は男子の意氣であり、また男子許りでは無く女子までも、現代に於ては大なる勇氣を必要とするのであるから、敢て諸君の勇氣をそぎ、恐怖を起させる様なことを目的と

はせぬが、事實だから止むを得るのである。依つて今少しく諸君の前に都會の如何なるものであるか、またそれより進んで、農村から年々上京する青年男女が、如何に困難と失敗との慘狀を現出してゐるかを説いて見やう。

農村青年諸君、試みに日々の新聞紙面に就みて見給へ、(地方新聞にも散見するが成るべく東京大阪等の各紙上に) 日々注意して見てゐる諸君は既に承知されて居ることでもあらうが、如何に地方青少年男女の上京者を都會の惡人等が遇してゐるか、實にそれは驚くべき事實が多ゐるでは無いか。或者は汽車中で既にボン引きなるものゝ手にかゝつてゐる、其ボン引きなるものは、或者は商人らしく、或者は紳士らしく、或者は田舎の豪士らしく其他種々様々なる化物となつて車中に乗り込んでゐて、金を持つたものと見れば、それを巻き上げる手段を講じ、若い女でもあつたならば、己が勝手にした上句、これも又金に替へてやらうなどとして、初めはそんな惡人相な處などは少しも見せず、如何にも親切らしく諸君に接近する。そして其

目的をまんまと達してゐる。

また或者は、農村に在つては非常な勇者であり、搗て、加へて、學識あり才智ある有望な青年として、『彼の方なんか都會に上つたならば大した成功が得られるであらう、學問でもしたならば、傑の學者になるであらう……』などと評されてゐたそのものが、一度汽車で東京に着て見ると、先づ第一に、其無數な客の汽車から噴き出されて、市中に散らばつて行く驛前の光景を見ただけで、既に度膽を抜かれて呆然としてゐたものを、刑事が見付けて保護を與へたなど、云ふ虚構の様な事實さへある。

求職上などにも、蔭れたる事實は扱置き表面としてもこんな事などもある。先づ職業案内所へ行くと、帳簿閲覧料として、少なくとも五十錢、或は一圓の金を取られる。そして其帳簿に記されてある多數の就職口を見ると、既に店頭に出してある様な良い口は無ゐ、若しあつたとしても行つて見れば案外「イヤ遂今朝きまりま

した。」とか、「遂先刻まで決まらずにたでしたが遅れたのでそれはお氣の毒でした。」とか云はれる。また戻つて来て見て行つて見るとまた同じ様だ、又繰返して行つて見れば矢張同一、遂に調覽料の金はゼロになつて了はざるを得ない。がそれは初めから當然のことなのである。と云ふのは、彼等は巧みに法網をくゞつて、求職者を釣るべく、成可く求職者の望む様な多數の職業口があり相に並べ立て、看板をかゝげて待つてゐるのである。

世の尤も哀れむべき失業者、または求職者を喰物にするとは、諸君何と恐ろしい悪人ではないか、それが公然(殆んど)行はれて居るのであるから驚かざるを得ないのである。

若し、幸ひにして斯かる悪人の手にかゝらず、正當なる口入屋の手を経て何處かに住込んだとしても、これ又決して嬉ぶべき事では無い。何故かと云ふと、多くの場合、其處には既に前より住込んでゐる者があつて、如何に諸君が善であり正であ

る行爲を行つて居様とも、何とかして自己を主人に良く見て貰はうと云ふ考へから遂に新参者の欠點を探す、または凡ての失敗事、悪事の如きは、悉く主人の前には新参者の誰れ彼れであると告げる。斯かる場合、多くの雇主は、勢ひ長く手下に居た者の言を信用することになる。これ又止むを得ないこととせざるを得まい、之等の事に依つて、農村に在つた當時は善人であつた青年も、忽ち感化されて悪者となり、放浪者となり、果ては不良少年の仲間入りまでして、遂に社會的道的的精神病者を收容すべき監獄裡に送られると云ふことなども多るのである。

□新聞雜誌廣告の裏面

これ等の事實もまた單純なる農村青年の腦裡には、驚くべき事實として映するであらう。「職業あり人を求む」など、云ふ見出しで、日々の新聞誌上に、數多散見する小さな三行廣告などを見ると、如何にも良き相な各種の職業とか、雇主などの

廣告などがあるが、之等の多くは、態の良い所謂サギ師である。これまた巧みに法律の網外に在つて種々なる悪事を働いてゐるのである。それが何うかと云ふと、諸君の如き農村の青年で無く、永年都會に住居してゐる人々の中にも、随分それ等の悪人のワナに懸けられる人々すらあるのであるから、それ等を的に上京する地方の青年男女が失敗するのは元より當然のことと云はねばならぬ。

斯く云つたなら、諸君は直ちに、「仕うしてそんな事が現代に於て行はれて居るであらう、第一新聞誌が悪の、そんな廣告などは載せなかつたら良ゐでは無いか。」位に思はれる御方が多のこゝと思ふが、既に々々現代文明觀と云ふ様なことで述べてもある通り、現代文明はそれ程善美なものでは無く、有益なものでも無ゐから、これ又當然なのである。何故かと云へば、余は敢て新聞社を辯護するのでは無ゐが、新聞社も一つの營業である。營業である以上大ひに利益を謀らなければならぬ。利益を計らうとする以上、何んな廣告にせよ、持つて來られれば料金を取つて載せ

なければならぬ。収入の料金以上に澤山の金のかゝる手數などを經て、持つて來る廣告の内容を一々正してゐた日には、利益を謀り、金を儲けると云ふ目的に反して了ふ。尙それ以上に種々なる理由や關係もあるが、一寸述べると先づこんなものとなるのである。

敢て、新聞誌上の廣告全體が斯様なものであるとか、または、少なくとも求職者を宛とする廣告の全部が斯くの如く悪人の手先きであり手段であるとか云ふ譯では無ゐが、先づ新聞廣告の一部、また其裏面には仕う云ふ悪事が行はれて居て、純良なる求職者などを喰物に仕様としてゐるか云ふことは、諸君よこの僅かな説明に於ても明白であらう。

□斯んな事實もある

回を重ねて述べ來つた種々なる事柄に於て、既に、諸君は農村青年諸君が

都會に出で、何う云ふ有様であるか、また農村青年諸君の見た都會と、實際の都會とが仕う違つてゐるか、或は農村青年諸君は現代の都會に出で、生活すべく適してゐるか否やなどの問題を餘程肯かれたこと、は思はれるが、此處には余の實驗談中から（前記の事實も多くは實驗談ではあるが）特に一例を揚げて參考までに説明をすることにする。

時は數年前のことである。嘗て茨城縣下某地の兵營建築の盛業中の折のことであつた。花の櫻も大方散つて、東京は既に夏を迎ふべく種々なる準備はされ、各公園の樹々は緑の若葉に包まれた晩春の或日のこと、府下東葛飾郡は松田町に赴つて、或る目的の爲めに一夜を同地の木賃宿に明した折のことである。恰度夕方、余が其處に投じてから一時間餘りも過ぎた頃であつたと思ふ、奥の間に一人貰をふかしてゐると、店の方で話し聲がする。ふと其方へ耳を傾けてゐると、一人は青年らしい聲、一人は宿の主人らしいこれも男の聲で話してゐる。

「實際最う仕うすることも出来無んですからこの着物を賣つて支拂ひすることに
して一と晩泊めてやつて下さい……。」

「サア何うも困つたものですなア——オイお花何うし様なア——。」

「仕うにでもしてやりなさい……わしや忙しいのですから……。」
と今度は勝手下の方で答へる女の聲までした。

「ちやア恚うしませう——今古着やを呼んで来るから、其人に貴郎の着物を買つて
貰つて、其お金で私の處へ泊つていただく事に致しませう……。」

「では何うかそうして下さい、何せよ此の通り雨は降るし、最う日は暮れるし、第
一喰はず飲まずで一昨日の晩から歩いたのですから、身體が勞れてゐて何うする
ことも出来ないのです、……何うかちやア然うお願いします。」

と如何にも困つたらしいのは先きの青年の聲である。間も無く今度は一人の別な
男の聲が加はつて、

「では廿五錢で戴きませう……。』と云ふと

「最う少し買つてお上げなさい。」

と宿の主人の聲もする。

「エ、良う御座んす、幾許でも構ひません、今夜泊れさへすれば良いんだから……。』

とはまた青年の聲であつた。

此の時まで耳を澄してゐた余は、ガラリ障子を開けて廊下に出ると、「まつたく」と叫び乍ら店頭の方へ飛び出して行つた。見ると三人の者は一枚の新しい印件天を真中に置いて、上り口に驚いた様に呆然りしてゐる。余は先づ青年に向つて、

「困つて眞物を賣るて之のは君だな。」

と云ふと、件の青年は何と思つたか、

「ハイ左様で御座います。」と恐縮の體に云ふ、其答へをきゝ乍ら、

「オイ古着屋、これが廿五錢か？ 人の弱味へ付込んで、そんな法外なことをして

はいかんど、貴様は要は無のから歸れ、ア、御主人、時に此の方の支拂ひは我輩が前拂ひにしてやるから泊めてやつて呉れ——。」
と思はず聲を強くして云ふと、古着屋と云ふ男も、宿の主人も、「ハイハイ。」と恐れ入つて了つた。

當前ならば、古着屋には例へ幾許でも金をやらなければ氣の毒でもあつたけれど、直ぐに黙つて恐縮のまゝ、歸つて行つて了つた。直ぐに其青年は余の座敷に案内させた其後種々な事情を訊くと先づ次ぎの様であつた。

青年は山梨縣甲府在の或農村出身の志村某と云ふのであつて、三年前に苦學の目的で上京したが、中々苦學は出来無い。田舎の様な緩かな働き方で無のから、勞働しては兎ても其後に夜學などへ行つても少しも頭には這入らない、そうかと云つて體を樂をしてゐて學問する道は無のからと思つて、探して見たが何程探しても先づ無いと云ふ外仕方がない。一そのこと勞働でもするなら商業して身を立て様——恚う

決心して、奮發して天坪一本の商人に成つて野菜物を賣つて廻つたが、初めの中は中々それも儲から無い。仕うも、古郷にゐて近の甲府市へ賣りに行つた経験はあつても其様には兎ても行かない。でも幸ひ、間も無く凡てに通じて來て儲かるのは儲かる様になつた。

ところが、今度は問屋の若者とか、同業の人々から何とか云つては費はせられて了ふ。これはいかんと思つて、商賣を濟して家に歸ると今度は一人で忽ち出かけて、それ等の人々と成るべく近寄らぬ方法を講じた。すると、歩んでゐると種々なものが目に付く、物品が買ひ度ひ、美味いものが喰ひ度ひ、芝居に這入つて足を休めてゐると、若る婦に近付かれる。又出かけて歩く、賑かな處を歩く、淺草へ行く十二階下へ廻つて見る、——と女の側へも寄つて見度くなつた——と斯んな具合で遂に墮落して了つて、今度は金を貯へ様とした目的がゼロになつた許りか、終ひに至つては僅かの資本金までも費つて了つて何うすることも叶はなくなつてゐた。此時

水戸の兵營工事があつて、行けば良い勞金になると云ふにとを聞付けたので、人夫となつて行つて見ると驚いた。其處はまるで地獄であつた。牛馬の様にこき使はれる。そして少しも勞金は渡して呉れぬ、でも仕うすることも出來得ぬので三ヶ月間は死んだ氣になつて辛棒してゐたが、遂に堪え兼ねて朋友と相談の結果、一昨夜折からの降雨に監視人の油断に乗じて、三十六人心を合せ、逃げ損じたなら死ぬまでも反抗も仕様と云ふ決心で、一丈餘の塀を乗り越えて漸く幸ひ逃げ出すのは逃げ出したが隊を組んでゐては人目に留まるからと云ふので、皆別れ〜になつて了つた。そして私は先づ東京へと思つて此處まで今夕逃れて來たところでした。私たちが同時に、東京から七百人の夫婦が行きましたのですが、其中には私たち同様、地方から出て來た青年などが大多數の様子でしたが、噫實に皆氣の毒な人たちです、私は今度つくづく故郷を出たと云ふことを遺憾に思ひます、云々。

讀者諸君、此の事實は何事を語つて居るであらうか？ 少なくとも、都會生活に憧

標して、それを夢見つゝある青年にとつては、大なる注意を以て、熟讀玩味して、其中に含まれたる事柄を充分推考すべき事件だと思ふ。

□農村青年の弱點

以上農村青年と都會とに就つて説き來つたところを總合すると、農村青年は、現代の都會に出でて生活すべく餘りに弱者であると云ふことになる。語を變へてこれを云へば、都會は餘りにも強者であり、悪者である爲めに、農村青年の出で、生活するには到底適したところで無ると云ふことになる。

それなら、現代は悪人の勝利を得る時代であつて、善人は敗北の慘を見る時であるか？——或は斯う解釋されぬとも限らぬから此處に注意して置くことに致さう。悪人が勝つて善人が敗ける様に見えても、決して然う云ふものでは無る。若し善者が悪者以上に強い力を持つてゐたとしたならば、決して一寸見えるだけでも善者が

敗北者となる様なことはないのである。また、例へ善者其ものが敗者ご見たところ、それは人世の一面であり、暗黒面なのであつて、必ずしも人世の全體では無る。必ずしも誤解してはならぬ。

例へたならば、世の中は宛然剣道や柔道の試合の様なものである。如何に相手が逆手を以つて懸つて來ても、自己にそれを見抜いてそれ以上に出ることへ出來たならば、決して逆手を使ふ悪人の爲めに、敗北する様なことは無ると同じこと、善者に於てそれに應ずるだけの實力さへあつたならば、悪人の爲めに困しめらるゝ様なことは少しも無ると云つても良のである。

農村青年諸君の有して居らるゝ從順、悠長、單純、正義其他の種々なる性格は、それ自身が都會生活上適せないまでも、必ずしも敗北者となるべき素質では無るのである。そしてそれ等は悉く農村青年諸君の美點なのである。一面都會生活上適してゐないから欠點の様に見ゆるものゝ、必ずしも欠點では無るのである。若し

諸君にして都會に出で、勝利を得様と思はるゝならば、先づ第一に自己の實力を養成せねばならぬ。充分實力の養成をし充實したものとつたならば、諸君は何時都會に出たとするも、屹度敗北者として空しく失望の淵に墜つる様なことは無いのである。余は少しも悪人になれとは云はぬ。善にして強者となれと切にお誘めするのである。また一寸見ると欠點であるそのものを無くせよとは決して云はぬ。その欠點は事實に於て諸君の美點なのであるから、益々それを養つて完全なものとするゝことを切望する次第である。

□先づ郷里に成功を謀れ

農村青年諸君が、都會に出で、成功することの容易で無いことは既に述べた如くであるが、霸氣満々たる青年時代の者に向つて、「これだから全然諸君は都會生活を希望することは止めなければならぬ」とは余は云はぬ。そんな不自然なことは云ふべ

くして到底行はれないことでもあるから尙々のことである。で此處にはそれ等の人々に向つて一とつの警告を與へて置くことにする。

諸君にして、都會に出でて成功し様と思はるゝならば、先づ、諸君はその前に、郷里に於て成功するが良い。然し、郷里に在つてでは充分腕が振へぬ」と云ふ青年があるか知れぬが、そんな青年は、何處へ行かうとも到底成功することは出来ない青年である。

地方であつたなら、例へそれが其地方に於ける大なる都會の部分であつたにせよ、必ず中央の大都會に比して大いに活動上容易な點に富んでゐる。詰り、生存競争の激しさが少ないのである。其處に於て成功出来得ない位ならば、何うして大都會に飛出して成功することが出来様、決して出来得ないのである。また、職業上などから云ふても然りである。如何なる職業に従事して居様とも、其人物に特別なところがあつたならば、其特質を其職業の上に表はすことが出来る。支那の人と云ふ

と、なんだ支那人かと蔑視するかも知れぬが、孔子は決してたゞの支那人ではない。所謂世界の孔子であるが、其孔子に就つて見給へ、例へ羊飼ひの業に従事してゐた時でさへも、孔子の孔子たる處を表し得たでは無いか。將來の大政治家であらうとも、大學者として立つ可き人物であらうとも、必ずそれがそれだけの價值あり實力を發揮すべき素質のものであつたならば、農業上なり、商業上なり、工業上なり如何なる職業の上に於つても、其處にも必ず其天才的特質とも云ふ可き一種の勢力を表現することが出来るのである。

そしてその現に従事する業務の上に、充分一種の成功を得られたならば、その時こそ、初めて諸君が都會に乘出しても、成功する事の出來得る時期が來たのである。

『斯んな田舎の農村では爲す可き事が無る、行ふ事業が無る。』などと云ふ青年であつたならば、それは必ず、何處へ行かうとも、行ふこと成すことのない青年なのであることを知らねばならぬ。

農村青年諸君 諸君の農村には尙ほ幾多の爲す可き事業が諸君の活動を待つてゐる。恰度都會に尙多くの爲すべき事業があり、人類の世界に多くの事業の殘されてあるが如く、諸君の農村にも多くの爲す可き事業は尠なからず存するのである。諸君の爲すべき事の無ると思はれるのは、事そのものが無るのでは無くして、諸君の頭腦がそれを見出すだけの力を有してゐないのである。

誠みに農村の現在を見給へ、諸君の農村には日々他地方人の出入して、諸君に種々の物品を賣り、種々の事物を教へ、種々のものを云ひ、種々のものを語り、種々の力を注ぎ、種々の事を強ふと云ふ有様で、諸君から受くるところ無く、諸君から貪り、諸君から取ると云ふ次第で、諸君は、全然自己を失ひ、他の爲めに動かされて許りゐるでは無るか、勿論凡ての勢力は、中央の都會から地方の都會へ、地方の都會からその農村へ——と波及してゐることは、人の世の必然的現象ではある、然し乍ら、我國の農村はその傾向の特に甚だしいこと頗る多ゐるでは無るか。それには

尙我國の現狀が甚だしい過度期であると云ふ理由もある。けれど、要は前きに述べた「事業そのものが無なのでなく、諸君にそれを見出すべき能力が無の」に歸着するのである。

諸君の農村を見ると、多くの地方で、其地方交通の要路には大方相當な繁榮を來してゐる二三の商店などを見るが、それ等が十中の八九は必ず他地方人であることが一致してゐる。而して其店の多くは、土地不相應とも想はれる程の贅澤品、流行物などの商品を並べたて、それでドシ／＼發展してゐる。日用品を初め、一切の農村民の必需品の供給を行つてゐる。尙一面には地方産出物は殆んど全部彼等の手に依つて他の地方に賣り出されてゐる。これは尤も多く各地農村に觀ることの出來得る現象であるが、是等の大勢力を他人に委して平然としてゐられると云ふ農民を、何うして無能力者、無智者であるか云はぬ譯に行かうぞ、到底オベツカのお世辭でない限り、農民諸君が呆放だと云はずには過ごされ無いで無いか。

斯かる勢力は、決して一部の經濟的小勢力では無い、農村に於ける種々なる内部の支配力をも含有してゐるのである。我農村の人々が、無益な物品を購ひ、無益な金銭を消費し、得られ可き多くの利益金を失ひつゝあると云ふ經濟的損失許りで無く、輕薄なる風潮に泌み、俗悪なる流行の囚はれ兒となるなど云ふ、凡ての惡風、凡ての弊害は、多く彼等商人の慾心を充たさんが爲めの犠牲として生み出されつゝあるのである。

農村青年諸君、斯かる勢力を諸君の手に收め、惡を去つて善となし、醜を捨て、美となし、不利を化して利となすと云ふ方法を講ずるならば、諸君よ此處にも死に瀕せる我農村をして、光輝ある樂土に導くと云ふ、農村に於ける根本的大問題、大事業があるでは無いか、斯くの如きはほんの一例に過ぎ無のであるが、之れに依つても余が「事業が農村に無いので無く、諸君に見出す力の無いのだ」と云ふ事實の實際を肯かれることであらう。

近來各地に、これ等の損失を防ぎ、利を收めんとして設けられたる多數の機關を觀る。ところで其等の機關の實際は何うかと云ふに、只僅かなる經濟上の問題のみを捉へて其精神を忘却してゐる。否その僅かなる經濟上の事實すら満足に掴み得て居らぬ爲めに、名は甚だ美にして、其實際は空なるものに終つてゐるのが頗る多る。購買組合と云ひ、産業組合と云ひ、販賣組合と云ひ、其他何々と云ふ比々皆多くは空名に終つてゐるの現状では無いか。

余が諸君に對つて『先づ郷里に成功を謀れ。』と云ふのは、都會に出づるを止めよと云ふのでは無い。又海外に赴くを止よと云ふのも無い、諸君にはまだそれだけの準備が出来て居らぬ、益々準備を充實させて後に進軍攻勢をとれと云ふのである。一より初めよ、十より事を爲す勿れ、枝を生ずるには先づ幹を要す、その幹を先きにせよと云ふのである。我農村の青年諸君、諸君は刮目して先づ郷土に事業の發見を爲し、成功を謀る可きではあるまらぬか。

農村青年と文學

□文學志望青年に告ぐ

近來我農村青年の間にも、我國現下の大勢に洩れず、文學者志望の青年の多ることもまた一つの事實である。余は我農村青年中の斯かる志望者の爲めに特に此の一章を以てするの穴勝ち無益なことでもあるまいと思ふ。

由來我國は世界に有名な多濕多潤な氣候と水土とを有する國土である。従つて三千年の昔、頗る勇猛な殖民的氣風を有して此の島國に據つた我大和民族の祖先も、歴史の頁を重ね來ると共に、前記の如き氣候水土に養はるゝ間に、次第に轉變して遂に現代の如き淺くして輕き多情多感の國民性と化したのである。其爲め、我國民は、一般に多少の詩人的氣分を具有してゐる。自己の文學的天才を有するものと見

て、文學志望を起す青年の多ものも、大いに此處に原因するものと云ふても良からう。

ところが、斯様な次第であるから、青年諸君自からが自己を判断するに、文學志望者として適當な素質を有してゐるものとするのは多くは大なる誤解であつて、實はそれが我國民性の普遍性なのである。一般の人よりも、吾れは文士の素質に富むとか、または其天才であると思はるゝものも、其多くは、たゞ他の人々より斯かる特質を發揮するに都合好き境遇に在つたと云ふ場合に過ぎぬことである。

また、我國には、殆んど文學上世界に誇るべき何物をも有してゐない、勿論開國日尙淺き明治以後に於て、そう／＼急速に生れべきものでも無く、——此の小島國を以て世界と觀た鎖國時代に、世界的文學の發達を見なかつたと云ふのも當然のことではあるが、それ以前に於ても、徒らに軟文學に流れて、島國的小文學の隆盛を觀るに過ぎなかつたのである。

然し今日以後に於ては、世界的文學の發達を來すべきでもあり、また然すべく努力すべきでもあらうけれど、我國民には、尙それ以上の急務が多、元來世界的日本の世界に認識されたと云ふのは、決して我文學の如きものに於て認識されたのでは無。此の點から云ふも、我農村青年中の文學志望者の如きは、文學以上の急務に向つて努力し奮勵する必要があると云はねばならぬ。

尙此處に云はねばならぬ一事がある。それは、斯かる文學志望者の青年が悉く都會に出で、希望を達し様としてゐることに關してである。都會に出で、と云ふ裏面には、他の種類の青年と違つて、多くは、田舎では生活の不可能だからと云ふので無く——都會に出なければ文學は學ばぬものかと考へてゐる、——と云ふ事實がある、余の此處に云はんとするところは即ち此處なのである。

我國現下の大部分の如く、淺薄なる戀愛文學、都會文學とも云ふべきものに成功を望むとするならば、或は是非都會に出なければならぬ事かも知れぬが、少く

も今後の世界的日本の文學者として立たうとするものに有つては、敢て都會に出る必要は見留められぬ、と少なくとも余は思ふのである。勿論或程度までの形而上の資格とか云ふ様なものを得べく、其れに應ずるだけの資力を有して學ばんとするものか、またはそれを得て満足すると云ふ様な者であつたならそれは問題外のことであるが、眞の天才を有し、それを發揮して眞實世界の大文豪となり、大文學者とならうとするには、尤も肝要なる青年時代を、現代の都會に送らうと云ふのは、それに依つて得る處と失ふ處とを合せ、それにイコールの答へを求めるときは、何れが有利であるかを疑はざるを得ないことと思ふ。

今日世界の文學者と云ふ様な人々は、多くは秩序ある學校教育など受けたものが非常に少ない。またそれを中途で止めた人々が多い。我が國現代の人々に就つて見るも、また然る傾向の少なく無ることが見出される。中にはまた多數の學校出の人々も無の譯では無いけれど、決してそれが大學の文科邊りに學んだ人々だとは云は

れぬ。他の種々なる教育を目的とする學校出身者もある。尙一面から見ると、文科の出身者が、悉く文學で打ち出して居るかと思ふに、然りと云ふことが出來得ないのである。それ等のこと以外、尙、歴史の古今、洋の東西を通じて、

□都會に大人物は出ない

と云ふ事實もある。そして其事實は文學者にも共通してゐることがある。元來都會生活に於ては、田舎の生活に比して、深さ——と——重み——とこのある、眞の思索——眞の研究をするに不適當な點が多からである。

此の點から云ふても、眞に大なる文學者とならうとする人々は、必ずしも都會に出づるの必要が無るのではあるまいか、農村青年諸君にして、文學志望者であるもの、大いに考慮すべき一大重要事件だと思ふ。

文學者と田舎生活と云ふことに就つても、また面白い事實がある。我國目下の中

中央文壇の人々の中などでも多くの人は田園即ち農村の生活を好まれてゐる。またそれを實現されてゐる。小説不如歸で我が文壇に異名を揚げた蘆花徳富先生の田園生活は云はずもがな、一名文士村と云はれる程文壇の人々の多く居住されつゝある大久保は、帝都に接しては居るものゝ、郊外の田園、即ち諸君の居住地と同じ農村では無るか、またロシアに有名なトルストイ伯などを初め、世界の多數の文學者が、諸君と同じ農村に居住して居るのである。でそれが現在許りで無く、今後に於て益々然うしたことになることと思ふ。

それに就て此處に偶然にもひとつの新しい報告が、此の筆を執つてゐる現在の遂僅かに二時間前、余の手下に達した。参考までに記入して見様、

「遠い越後の海岸にゐても、行くに不便な三崎の片田舎にゐても、さては鎌倉、茅ヶ崎、鶴見、鶴沼、どんな所にゐようとも、中央文壇に顔を出すのに差支へないやうになつて來た。今に東京に住んでゐるものは、ジャアナリストばかりになつ

て、専門の作家や批評家はみんな地方に轉じてしまふかも知れない、云々。(讀賣

新聞一日一信に晁と云ふ名で載せられた前田氏の文)(大正五、七、八)

實際現今の様に交通機關が發達して何んな片田舎に住んでゐても、中央の事々物々を其日の中にも知ることが出来る時代となつては、敢て中央の都會に許り集まつてゐると云ふ必要が凡てのことに於て少なくなつて來てゐるのであるから、例へ修業時代の青年であらうとも、事實都會に出なければならぬと云ふことは無ることゝなつたのである。

□文學者の觀た農村(農、農民、農業)

農村と文學、及び農村の青年と文學と云ふことに關して、述べ來つた續きとして、此の文學者の觀た農村と云ふ様なことを述べるのもまた農村青年の文學志望者に參考となることは勿論のこと、一般の農村青年に有益と思はるゝ爲めに、一寸書ゐて

見様と思ふ。

然し世界の多くの文學者が農を讚美したり、農を歌つたりした様なことを、此處に一々述べたならば、餘りに此の章許りを長くする恐れがあるゆへ、此處にはたゞ我文壇に名高の蘆花徳富氏の「みゝすのたはごと」の中に農と題して書かれてある一部を記しておくことにいたさう。

農

(一)

土の上^{つち}に生れ、土の生^{つち}むものを食^くふて生^いき、而^{しか}して死^しんで土^{つち}になる。我儕^{われら}は畢竟土^{つち}の化物^{はげもの}である。土^{つち}の化物^{はげもの}に一番^{いちばん}適當^{てきとう}した仕事^{しごと}は、土^{つち}に働^{はたら}くことであらねばならぬ。あらゆる生活^{せいかつ}の方法^{はうほう}中^{ちゆう}、尤^{もつと}もよきものを撰^{えら}み得^えたものは農^{のう}である。

(二)

農^{のう}は神^{かみ}の直^{ちきん}參^{さん}である。自然^{しぜん}の懷^{なごころ}に、自然^{しぜん}の支配^{しはい}の下^{もと}に、自然^{しぜん}を賛^{たす}けて働^{はたら}く彼等^{かれら}は、

人間^{にんげん}化した自然^{しぜん}である。神^{かみ}を地主^{ぢゆうし}とすれば、彼等^{かれら}は神^{かみ}の小^こ作^{さく}人^{にん}である。主宰^{しゆさい}を神^{かみ}とすれば、彼等^{かれら}は神^{かみ}の直^{ちきん}轄^{かく}の下^{もと}に住^すむ天^{てん}領^{りやう}の民^{たみ}である。網^{つな}島^{しま}梁^{りやう}川^{せん}君^{くん}の所謂^{いはずる}「神^{かみ}と共に働^{はたら}き、神^{かみ}と共に樂^{たの}む」事^{こと}を文^{ぶん}義^ぎ通^{とほ}り實^{じつ}行^{かう}する職^{しやく}業^{げふ}があるならばそれは農^{のう}であらねばならぬ。

(三)

農^{のう}は人生^{じんせい}生活^{せいかつ}のアルファにしてオメガである。

ナイルユウフラテの畔^{ほとり}に、木^{きの}片^{きれ}で土^{つち}を掘^ほつて、野^や生^{せい}の穀^{こく}を蒔^まいて居^かた原始^{げんし}的^{てき}農^{のう}民^{みん}の代^よから、精^{せい}巧^{こう}な機^き械^{かい}を用^{もち}ひて大^{おほ}仕^じ掛^{かけ}にやる米^{まい}國^{こく}式^{しき}大^{だい}農^{のう}の今^{こん}日^{にち}まで、世^せ界^{かい}に眼^めまぐろしい變^{へん}遷^{せん}を閱^めした。然^{しか}しながら土^{つち}は依^い然^{ぜん}として土^{つち}である。歴^{れき}史^しは青^{あを}人^{ひと}草^{くさ}の上^{うへ}を唯^{ただ}風^{かぜ}の如^{ごと}く吹^ふき過^すぎたに過^あぎない。農^{のう}の命^{いのち}は土^{つち}の命^{いのち}である。諸^{しよ}君^{くん}は土^{つち}を亡^{ほろ}ぼすことは出^で來^きない。幾^{いく}多^たのナボレオン、維^う廉^{れん}、シシルローズをして勝^か手^てに其^{その}帝^{てい}國^{こく}を經^{けい}營^{えい}せしめよ。幾^{いく}多^たのロスチャイルド、モルガンをして勝^か手^てに其^{その}弗^ふ法^{ぽう}を擡^たき集^{あつ}めしめよ。幾^{いく}

多のツエツペリン、ホルランドをして勝手に鳥の眞似魚の眞似をなさしめよ。幾多のベルグソン、メチンコフ、ヘツケルをして盛んに論議せしめ、幾多のガウガン、ロダンをして盛んに塗り且つ刻ましめよ。大多數の農は依然として、日出而作、日入而息、掘井而飲、耕田而食ふであらう。倫敦、巴里、伯林、紐育、東京は孤兎の窟となり、世は終りに近付く時も、サハラの沃野にとり上ぐる農の鋤は、夕日に晷めくであらう。

(四)

大なる哉士の徳や、如何なる不浄も容れざるなく、如何なる罪人も養はざるは無る。如何なる低能の人間も、爾の懐に生活を見出すことが出来る。如何なる数奇の將軍も、爾の懐に不平を葬ることが出来る。如何なる不遇の詩人も、爾の懐に憂を遺ることが出来る。あらゆる放浪を爲盡して行き處なき蕩兒も、爾の懐に歸つて安息を見出すことが出来る。

あはれなる工場の人よ。可哀想なる地底の工夫よ。氣の毒なる店頭の人、デスクの人よ。笑止なる臺閣の人よ。羨む可き爾農夫よ。爾の家は例へ豚小屋に似たりとも、爾の働く舞臺は青天の下、大地の上である。爾の手足は松の膚の如く荒るゝとも、爾の筋骨は鋼鐵を欺く、烈日の下に瀧なす汗を流すとも、野の風はヨリ涼しく爾を吹く、爾は麥飯を食ふも夜毎に快眠を與へられる。急かす休まず一鍬一鍬土を耕し、遑てす恚らす一日一日其苗の長するを待つ、例令思ひがけない風、早、水、雹、霜の天災を時に受けることがあつても「エホバ與へエホバ取り玉ふ」のである。土が残つてゐる。來年がある。昨日富豪となり明日乞丐となる市井の投機兒をして勝手に籬筋斗をきらしめよ、彼の愚なる官人をして學者をして隨意に威張らしめよ。爾の頭は低くとも、爾の足は土について居る爾の腰は丈夫である。

(五)

農程呑氣らしく、のろまに見える者は無ゐ、彼れの顔は澤山の空間と時間を有つ

て居る彼れの多くは帳簿を有たぬ。年末になつて、残つた足らぬと云ふのである。彼れの記憶は長く、與へ主が忘れて了ふ頃になつてのこゝに禮に来る。利を分秒に争ひ、其日々に損得の勘定を爲し、右の報を左から取る現金な都人から見れば、馬鹿らしくて堪らぬ。辰爺さんの曰く「惻かなやつは皆東京へ出ちやつて、馬鹿ばかり田舎に残つて居るでさア」と、遮莫農をオロカと云ふは、天網を疎と云ひ、日月をのろいと云ひ、大地を動かぬと云ふ意味である。一秒時の拾萬分の一で一閃する電光を痛快と喜ぶは好い、然し開闢以來まだ光線の我儕に届かぬ星の存在を否むは僻事である。所謂「神の恩は人よりも敏し」と云ふ語あるを忘れてはならぬ。

(六)

農と女は共通性を有つてゐる。彼美的百姓は曾て美しい都の娘達の學問する學校で「女は土である」と演説して、娘達の大抗議的笑を博した事がある。然し乾を父と稱し、坤を母と稱す、Mother Earth など云つて一切を包容し、忍受し、生育す

る土と女性の間には深い意味の連絡がある。土と女の連絡は、土に働く土の精なる農と女の連絡である。

農の弱味は女の弱味である。女の強味は農の強味である。蹂躪される様で實は塔載し、常に負ける様で永久に勝つて行く大なる土の性を彼等は共に具へて居る。

(七)

農程臆病な者は無い。農程無抵抗主義な者は無い。権力の前には彼等は頭が上がない。「田家衣食無厚薄、不見懸門身即樂」で、官街は彼等にとりてびく／＼ものである。然し彼等の権力を敬するは、敬して實は遠かるのである。税もこぼしなから出す。徴兵にも泣きながら出す。御上の沙汰となれば、大抵のことは泣きの涙でも黙つて通す。然し彼等が斯くするは、必ずしも御上に隨喜の結果では無い。彼等が政府の命令に従ふのは、彼等が強盗に金を出す様なものだ。此の邊の豪農の家では、以前よく強盗に入られるので、二十圓なり三十圓なり強盗に奉納の小金を

常に手近に出して置いたものだ、無益の争ひして怪我するよりも、と詮らめて然するのである。彼は従順である。土の従順なるごとく従順である。土は無感覺の如く見える。土の如く鈍妖した農の顔を見れば、限り無く蹂躪してよいかの如く誰も思ふであらう。然しながら其無感覺の如く見える土にも、恐ろしい地這りあり、恐ろしい地震があり、深い心の底には燃ゆる火もあり、沸く水もあり、清しい命の水もあり、燃せばかの黒金剛石の石炭もあり、無價の寶石も潜んで居ることを忘れてはならぬ。竹槍席旗は昔から土に等しい無抵抗主義の農が最後の手段であつた。露西亞の強味は、農の強味である。莫斯科まで攻め入られて、初めて彼等の勇氣は出て来る。農の怒は最後まで耐へられる。一たび發すれば、是れ地盤の震動である。何ものか震動する大地の上に立てやうぞ。

(八)

農家に付きものは不潔である。だらしないのないが、農家の病である。然し缺點は

常に裏から見た長所である。土と水とが一切の汚物を受入れなかつたら、世界の汚物は何處へ行くであらうか。土の土たるは、不潔を排斥して自己の潔を保つでなく、不潔を包容し淨化して一大生命の温床たるにある。「吾が父は農夫也」と耶蘇の道破した如く、神は正しく一の大農夫である。神は一切を好と見る。「吾の造りたるものを不潔とするなかれ」是れ大農夫たる神の言葉である。自然の眼に不潔なし、而して農は尤も正しい自然主義に立つものである。

(九)

土なるかな。農なるかな。地に人の子の住まん限り、農は人の子にとつて最も自然且尊貴な生活の方法で、且其救であらねばならぬ。

と、斯うである。如何に觀、如何に感じ、如何に書かれてあるか、一般農村青年諸君の熟讀して、よく其の眞味を研めべき文字である。

農村青年の立場

□その充實と發展策

既に説き來つた如く、農村問題は實に由々敷き大問題であつて、我帝國の國本たる農業そのものは斯くの如く窮迫し、今後の帝國を負つて立つべき我農村青年の立場は従つて今や非常な困難な地位に在るのである。而して農村に居ては飯が喰はれぬ、と云つて都會に出るのも不可とすれば、諸君は大いに迷はざるを得ないことであらう。然しまた既に述べた如く諸君の行路はある、否それを自から展ゐて行くことが出来る。また展ゐて行かねばならぬのである。前に余は、先づ自己の充實を謀り、然る後他に向ふべしと云つた。これより次第にその充實と發展策とに就つて説き進めることとする。

大いに餘力を利用すること。

土地の餘力、物品の餘力、時間の餘力、これ等のものを利用すると云ふことが、その充實方法中で殊に重要條件だと思ふ。

農村は自然の寶庫である。ありとあらゆる凡てのものをに入れてある。それを引出すのが農村の諸君である。諸君は既に／＼それを行つてゐる。然しながら自然の寶庫にはまだ／＼多くの餘裕があり残りものが藏されてある。それを引出して利用せなければならぬ。

東京市の如き大都會では、家と家との間に、四五寸位の宛ある間隙まで、此儘置ゐては惜しいと云ふので、近來「其間隙を無くして家々の堺を全部壁一重にしやう然うすると上野から品川までの間に於てだけでも、それから生ずる空地に依つて、大きい公園などを設けることも出来れば其他多數の家屋を建て増すことが出来るから、是非共然うせねばならぬ」など、云ふ問題が持上つてゐるが、其處へ行くこ

まだく、農村には多数の利用すべき個所が土地の上などにも残されてある。

一見すると、最早一點の餘地も無い様な場所であつても、其實まだく、澤山の餘力がある。そう云ふ所が非常に多い。嘗て余は各地漫遊中至る處にそれ等の餘力を澤山に見聞した。雑草が生茂つてゐる空地を見て、通りかゝつた農民に向つて「此の邊は雑草の外は何も耕作れないのですか？」と聞くと、「へい耕作れ無いことも無いんで、……馬鈴薯位のは出来るんですが……」など云ふ、「ちやア馬鈴薯位の出來るもそれが耕作つて割に合はないのですか？」と重ねて問ふと答へる。「ナニ割に合は無くも無いのだが耕作らないんだ。」と、尙「それでも肥料は何か與らないと成熟ませんか？」と重ねて云ふて見ると、「馬鈴薯位なら肥は要らないでさア。」だと云ふ。それでは何うかと思つて邊りを見ると、近い所に、淋しい民家が幾許もある。恚う云ふ様な場所は各地方に澤山見聞した。

然し此の場合、場所が不便な遠路の地でも無ければ、肥料が別に入用でも無く、

それで、例へ馬鈴薯なり取ることが出來たとしても、若し馬鈴薯を植える期節に於いて、勢力即ち農家に於ける時間の餘力が少しも無いとしたならば、それは不可能な話でもあるが、大抵の地方で、決してそれ程までに其期節に大多忙を極めるとは云はれ無からである。

それに、恚うした利用されない土地の其儘投げ出されてゐると云ふのは、大方其地方で多少生活上安樂な人の所有地であつて、それが爲め特に利用されずに在ると云ふ場合の多いと云ふ事實を識つて、余の如きは斯うした地方の人々を切に哀れまない譯には行かなかつた。

例へ自家で生活上の問題がそれ程までに窮迫してゐないにせよ、同じ地方の、然かも同村内とか、同宇内と云ふ様な小さい共同生活の一部に在る人々が、非常な窺乏を告げてゐるにも拘らず、其人々にそれを耕作させ様ともせぬ、又反對に、極めて生活上の物資に乏しい人々も、其持主の何物をも考へて居らぬと同様、そ

れらの人々が、それを借りて、例へ馬鈴薯なり耕作らぬと云ふそのことが、余をして悲しませ、哀れませたのであつた。

農村青年諸君、諸君は如何に思ふであらうか、若し、此の場合、これが商人でもあつたならば何うであらう。

『そんな小さい利益では仕方が無い、まア誰か行る方があつたら勝手にやるさ、俺はそんな小利益を得様とは思は無い。』

と斯うした態度に出づる商人に、一人として必ず成功者を來たすことの出来得ないのは當然ではないか。

□自然は大なる寶庫

農村青年諸君、重ねて云ふ、自然は大なる寶庫であることを、よく地方で云ふことであり行ふことではあるが、「桐の樹一本が娘の嫁入り道具の一切となる。」と、一

寸した空地でも、其處に一本の桐の樹を植ゐて置くと、幼少な娘が成人して嫁に行く頃には、其一本の桐の樹で長持や箆筒を造る材料にも成れば、また其工賃も支拂ふことが出来る、と云ふ此の事實は、眞に良く、土地を充分に限無く利用すると云ふことを訓へてゐる。

斯様に土地を限なく充分に利用することが出来得たならば、それこそ充分な内容の充實であり、自己の充實農業の充實である。そして其充實は勢ひ大發展の大なる資本では無いか。知らしむべからず主義で教養され來つた我農民の多くは、今尙見聞を擴め様ともせず日を重ねて居るもの、多ると云ふ我農民は、其長い年月の間に習慣性となつて、第二の天性ともなつた盲目に依つて、何時までも居眠り同様なことを續けてゐる場合が多る爲めに然うなつてゐる。これは眞に我農民の落度であると云ふことを自覺して貰はねばならぬ。

充分な充實を、我農民の一般が持たない中は、諸君の目には盜賊の如く見える官

權を振り廻す御役人様方は、何時までも、諸君に盲従を強ふることを忘れてはならぬと思ふ。

これ等はほんの一例に過ぎぬが、諸君の舞臺である農村そのものには、諸君が刮目してよく探つたなら、まだ、澤山に餘力が、土地の上などにも見出されるのである。農村青年諸君、諸君は大いに發奮して、其餘力を利用することに勉めて貰はねばならぬ。

眞の叫びを擧げ様とする我農民は、先づ大いに自己の充實を謀らなければならぬことを重ねて記しておく。

□農村と時間の餘力

土地の餘力を利用すべきことは前説の通りであるが、此の、時間の餘力を利用すると云ふことも、現在の我が農村に於てはまた甚だ急務であると思ふ。

一寸考へると、我農村の諸君には到底時間の餘力などは少しも見出され相にも無様である、が其實、随分と時間の餘力があることを忘れてはならぬ。諸君よ、我農村の労働時間は何れだけになつてゐるか、既に識らるる方も多かあらうと思ふが、我農民の平均労働日数は、一ヶ年を通算して二百日に満たないでは無いか、何うしてこれに對して餘力が無ると云はれ様、イヤ、實に大なる餘力が潜んでゐるのでは無いか。

元來我が農村には餘りにもコセ／＼した休遊の日が多過ぎる。休養は一面活動の資本ではあるが、多く休養に做れるとまた反對に労働することが出来無くなる。我農業労働力の大體が工業等の他の労働に比較して、其活動力の甚だ鈍いと云ふことは、他に種々なる關係のあることは云ふまでも無いが、憚うした休遊日数の多ると云ふことも、また一種の原因となつてゐると云ふことも云はれると思ふ。

一般工場などの工業労働などを見給へ、官立のあるものなどは別として、大方の

工場の休養日は幾日あると思ふ、一ヶ月に二日間ではないか、彼等は一日十五日の二日間の休養を與へられるだけで、然かも農業労働などに比して遙かに激烈な活動をしてゐるでは無るか。勿論それには多少時間の關係もある。が又中には反て農民以上の長時間を働かせられ、または働いてゐるものもある。二日間の外に、正月や盆其他の休日を合算しても、精々一年中に於ける休養日數が、彼等に於ては五六十日に過ぎないでは無るか、外に勝手に休む場合と云ふ例外もあるが、何せよ諸君の様に一年の半分近くを休養してゐると云ふものは先づ他に無からうと思ふ。

普通の多くの月給取などでも又然うである。六日間働いて一日休むと云ふと、大分休みが多る様に一寸思へるが、其實多くはない、それで彼等を見給へ、頭腦の中の作用から、身體の上の行動までの一切を、上官とか先輩とか云ふ奴等から押へられてゐて、宛然機械や器具も同様に使用されてゐるでは無いか。彼んな困しい不自由であり究窟極まる活動ですら、それでも先づ一ケ年に精々五六十日から多くて七

八十日の休日しか無いのである。

□境遇を支配せねばならぬ

前に云つた様に、事實に於て我農民の労働時間は實に少なくなつてゐる。然しそれでは我農民は自から遊んでゐて困る様なものでないか、——或は、少なくとも諸君の困るのは諸君が多く休んで遊んでゐるから悪るものだ——斯う云ふ人々も多る様であるが、然し決して罪は諸君に許りあるのでは無い、第一諸君の境遇から來るので、詰り農業そのもの、弱點なのでもある。

然うかと云つて諸君はそれで安閑としてゐてはならぬ。如何に天然自然の法則であるからと云つても、其まゝに放つて置めて自然的の生活をするのが良いとは云はれぬ。尤も自然的に生活してゐる人間を稱して、一と口に野蠻人だ云ふ。少くも吾々人間は、然う思は無い譯には行かぬ。大自然の法則、大自然の生んだもの設

けてあるものを、取つて持つて吾々人類の生活上都合の好い様に利用し活用して行く、それを我々は文明人だと云ふ。其處に人間の價値があり、人生の意義を生ずるのである。

であるから、その知らず識らずの間に農業と云ふ職業は怠り勝ちになると云ふ欠點弱點を見出して、反てそれを利用し活用することにせねばならぬ。

農村青年諸君、諸君は斯くして諸君が現在の休養日数を減じ、大いに時間上の充實を得ると云ふことに勉めて貰ひ度ひのである。

我國は凡てが家族制度となつてゐるので尙々弱點を持つことになつてゐる。同じ農業を行ふにしても、自家に働く場合と他の家に働く場合とは大いに其場合の心持が違ふ、少なくとも他に行けば意識は筋張してゐる、従つて多く勞力を出すことが出来るが、諸君は我農村の勞働力を増進し、時間上の充實を謀ると云ふ場合に於ては、斯かる事柄なども大いに参考とすべきだと思ふ。

此處に五人なら五人の青年が共同して、今日は甲君の家に一日働らき、明日は乙君の家の仕事に行き、其翌日は丙君の家の勞働をすると云ふ具合にして、共同し、競争して活動すると云ふ、所謂勞働團隊なるものが、近來各地方に多く出來て來たが、これ等は大いに良いことと思ふ。

一人では五日間の日數としては到底出來得ないものも、一種の張合ひ、と云ふ風な強味を生ずる此の共同勞力でやつて行くと、五人では出來ない筈のものも五人以下で出來ることになる。すると其處に二日なら二日宛の餘力が生じて來る。それを五人分合せると十日間の餘力となる。斯うした積極的に餘力を生み出すことに勉めてそれを利用し、また前に云つた様な日數の多い休遊日を少なくして消極的に餘力を作り、それを合せて利用したならば、大いに諸君は其處に時間上の充實を謀ることが出来る。

充實は他日發展の資であり、他に向つて自己を悟り得る資本であることを此處に

も重ねて記しておく。

□物品の餘力と其利用

此の物品の餘力と云ふことは、農村を充實させる爲めに見逃すことの出來得ない最大の餘力である。農村の物品と云へば云ふまでも無く農村に於ける直接間接の生産物である。土地に依つては、たゞ田畑以外何も無い様な所もあるが、それにはまたそれだけの物品がある。山地であつて田や畑の少ない場所であつたなら、又其處にはそれ相應な物品の生産がある。海濱ならば海産物がある。それ等の土地に生ずる生産物は、他の土地や都會へ運ばれて消費されるまでには、多くのものが相當な人間の加工が加へられる。其加工と云ふことを成るべく多くして生産物の物の價を上げると云ふことは、農村に於ける經濟上の大事件であり、大なる充實を得る資料である。人工其物は時間問題に比例して行くことは云ふまでも無いが、

先きに述べた時間の餘力を成可く多く生み出させて、それを此の物品の餘力を充たす事の上利用するのである。

そんなことは誰も行つてゐる、何處でも行つてゐる。——と云つて終へばそれまでであるが、好い加減に行るので無く、充分にやるのである。言葉を替へて云へば、これ以上は兎ても出來なぬ、それも——眞實のこれ以上には兎ても出來なぬまで行るのである。

此の物品上の餘力を利用すると云ふことに就ては、それを一々例など上げ來つて具體的に説明すると云ふことは兎ても此の一小冊子の能くするところで無い——また本書の目的とするところでも無いから、その具體的説明は略しておくが、此處に今まで述べ來つた三つの餘力の利用と云ふことを具體化した——否それより第一に此の物品上の餘力を、生産物と消費物との上に表はした實例を上げたなら。

信用組合、購買組合、生産組合、販賣組合と云ふ様なものがある。これ等のもの

をよく研究して諸君はそれを大いに利用し、農村に於ける凡ての充實と云ふことの上に活用して、その目的を達せられ度ひと思ふ。

餘力を利用して我農村の充實を謀ると云ふ此項を終るに臨み、尙一言を加へておく、羅馬の成るは一日にして成つたのでは無い、また今日世界一と稱されてゐる彼の丁抹の農村の發展も決して一寸の間に容易になつたのではない、我農村の充實して世界に日本農業の完成を謳はれる日もまたそう一年や二年にして出來得ることではなぬが、要するに農村青年諸君が努力の如何に依つて、それを早くも爲し得るのである。要は諸君が奮闘と努力奮勵に正比例するのであることを、忘れてはならぬ。其のことである。

□時所位に目覺めよ

我農村青年諸君、諸君は自己の立場に就つて充分の研究を遂げ、その時、所、位

に眼覺めねばならぬ。既に／＼説き來つた如く、諸君の責任は頗る重ぬ、諸君の爲すべき事業は甚だ多い、また諸君は如何に我運命を開拓して行く可きかに就いて大なる自由を與へられてゐる。諸君の立場は甚だ多事であると云はねばならぬ。諸君は大なる努力を以て、自己の立場に就いて研究し、その時所位の上に限覺め、直往猛進せねばならぬのである。

知らしむ可からず主義に依つた爲政者の下に在つた時代に在つては、諸君は何事も殆んど知るを要せなかつたであらう、たゞ鋤を以て土を堀り、種子をおろし、肥を施し、實を結ぶの日、鎌を以て刈取り、食物として人の口に運ばるゝの、僅かなる事を爲せば足りたであらう。御用米を納め、御用人として働き、領主の通行に土下座してこれを送り、之れを迎へて居れば足りたであらう。衣を作り得るも或物以上の上物を着ることも叶はず、刀は求めらるゝも二本と佩すことも許されず、女は買ひ得るも土百姓の金は土臭しとして女からは充分に持嘶されず——と云ふ如

くして、如何に多く財を貯ふるとも、費すべき道も殆んど無きが如き當時の農民には、敢て多くの金は無くとも事々に不足は無かつたであらう。

けれど、世は何時まで我農民をして斯かる箱入り娘としてのみは置かなかつた。四民平等の勅令と共に、諸君は長い間の究窟な籠の中から、廣い、廣野の中に放たれたのであつた。止められてゐた足は此處に伸す可き時代が來た。狭い眼界は忽然として無限の曠大に展開された。欲求してゐた異性に對する愛を自由に叫び得るの時代は來た。求め得らるゝの自由は與へられた。自由に叫び、自由に求め、自由に行き、自由に走るの此の時を得て、諸君は何うして全然舊の籠に居ることをのみ欲しやう、何うして親の監視ばかりを嬉ばうぞ、忽ちにして一部の人は走り出した、求め歩るいた、手當り次第接吻もした握手もした。自由の歡樂を唱へ、自由の嬉びを叫んで殆んど狂的にまであせり廻つたのである。

然し哀れむべし、箱入娘であつた我農民には、異性に對する理解を持つだけの理

智の明がなかつた。籠の鳥然としていた我農民は元よりの野鳥と其驅行を争ふて劣らぬだけの翼の強味を持たなかつた。自由に使用さるゝ時代になつたと云ふので、何でも蚊でも求めたが、何れが自己の生活に適して居るかを知らぬ能がなかつた。何れだけが我が生を保つに必要な物品であるかも知る由もなかつた。何人が我が夫として將來を託す可き異性の人なるかを解するだけの予備才識を持たなかつた。遂に他の人々と並行して行くだけの力量は、悲しい哉我農民には其過去に於て養つてなかつたのであつた。遂に盲目に求め歩るき、目くらめつぼうに飛び廻つたのであつた。其結果は實に悲惨と云はねばならぬ、力盡きて泣き、不平不満不充實に悶えない譯には行かなかつた。

それを見て一部の人は又考へた。噫吾々は火急で、飛び出さなくつて良かつた。俺れの子供には學問させなくつて幸ひだつた、俺の家では子々孫々決して學問など餘りさせぬことに仕様、到底自分たちの居所は土臭い場所でなければならぬ、何う

も他の人々は悪人である疑はない譯には行かぬ、怪しからぬ品物を吾々に賣りつけやうとした、強ひた、何でも敬して遠けるのが尤も策の得たものであらう、など、誤解するに至つた。即ち一部の者は自己を識らずして時代に突入して誤り、他の一部のものは、時代を識らずして己れを誤るに至つたのである。言葉を變へて之れを云へば、兩者共、時、所、位に眼覺めなかつた結果として、斯かる誤解と誤ちとを迎へるに至つたのである。

我農村青年諸君、時所位に従つて臨機應變なれと云ふのは、敢て倫理學上の道德問題而已では無いのである。凡て吾人人類の行路に於いては、時所位に相應しい行為行動に出でなければならぬのである。山を行かんとすれば坂路に堪へ、草木の間をぬけ、鳥獸に制せられずして行かる可き要意が無ければならぬ。海水を航せんとすれば、波浪に堪へ、風雨に抗して沈まざるの準備が無ければならぬ。それ等と比ぶれば、大正の時代、平等なる位置に並んでの、我農村の民としての居所を保持して行

くだけの凡ての準備、凡ての要意が必要なのである。學問もせねばならず、自治の代表者を選擧もせねばならず、租税も納めねばならず、其他何、其他何と、諸君は大なる自由を與へられたと同時に、又大なる責任を負はせられたのである。従がつて、今までの如く、盲目で過ごす譯には行かぬ。充分諸君は、時、所、位に眼覺めて進まねばならぬのである。委しくは「時代と農村青年」の項に於いて説くこととする。

農村青年と教育

□農民には學問は要らぬか

農村教育の必要、農民にも學問の必要であることは今更改めて云ふを要せないことである。然しながら、頑瞑な地方老農の一部の人々などに云はせると、一と口に「農業するものが學問なんかする必要は無か……」と云つて了ふ。また本書の讀者の中には眞逆に斯かる青年は無いと信するが、何うかするとまだ現代の我農村青年——今後の我帝國農業の死活を左右すると云ふ重大なる任務を帯びてゐるその青年の間にも、「農業するものなどは學問は要らぬ」と云ふ青年がある。甚だ慨歎の至りである。ところで、それは學問するのが悪いのでは無いが、實際また、前記の頑瞑老人や何も解らない一部の青年の云はるゝのも當然のことであると思はるゝ様な事實を、至る處に見ることが出来る。と云ふことも甚だ悲まざるを得ぬ次第である。

現今農村青年の、他人より多く教育を受けたもの——學問をしたもの——と云ふ人々に就いて見ると、その多くは、事實、教育を受けた爲め——學問をした爲めに祖先傳來の農業を打捨て、顧みないもの——又はそれ以上に「身を誤り、家を亡す」に至つた——と云ふ様な人々は甚だ少なくない。眞に慨はしい次第である。と云はねばならぬ。

恚うした事實を常に見聞する一部の老人や、一部の青年が「農民に學問の必要が無い」と叫ぶのは決して無理ならぬことであると思ふ。然し學問そのものは決して農村の人々を誤りはせぬ。害するのでは無い。たゞ學問を間違へてしたもの、罪であることは云ふまでも無い。少なくとも本書の讀者の中には、斯かる青年の無いことを信じ、また信じ度ひのであるが、第一、未だ「學問は農民に要らぬ」と思はるゝ諸君があつたならば、必ず其誤解を本書の通讀と共に解かれ度ひのである。

諸君よ、現象は必ずしも眞理を語つて居るものではない。表面が赤いからと云つて、必ずその物の中心まで赤いのだと云ふ理由は無い。恐るべき外皮の毬を見て、直ちにこれが栗の實の本體であると誤解してはならぬ。

□農業は學理の實現

元來學問は何んであるかと云ふと、人間が手足や頭腦で作つたものではない。此の絶大なる宇宙の眞理——大自然の具有してゐる法則——それを人間が識ること云ふのが即ち學問なのである。宇宙の眞理——大自然の法則の中に生活して行く吾々人間が、何うしてそれを度外視して生きて行くことが出来やうぞ。必ずそれは出来得ないのである。

一粒の種子が芽を生じて生長するのも、これ云ふまでも無く大自然の法則であり、大宇宙の眞理の發現されたもので、従つて又學理の實現であることは云ふまでも無

い。
然し乍ら、或人は云ふであらう。「自然の理が學問であり、自然の現象が學理の發現であるとしたならば、敢て現今の様な學校を建て、澤山の兒童を集めて、文字を教へ、書籍を用ひて教育する必要はないではないか、それよりも自然のありのままを見聞させて、天然の與へて呉れた學問を學べば好いではないか」と云ふかも知れぬが、それでは、まだ所謂天然自然の與へて呉れた學問そのものをも知らぬ人である。

文字を教へ、書物を用ひて學問を教へると云ふことそのことが、既に／＼天然自然の與へた學理を應用してゐるのであつて、學問の學問たるところは、即ち此處にも存するのである。何うしたならば此の目的を達することが、尤も完全に、尤も速かに出来るであらうか、それを考へて、其の目的を達する手段方法は天然自然の理から割出したなら、何うなつてゐるであらうか？ とそれを研め、それを應用する

のが學問そのものであるからである。
 斯く説き來つたならば、農業は學理の實現であることは誰人にも見易い道理であらう。又それと共に、その學理の實現である農業をやる農民に、學問の必要なこと——尙それより一步進んでは、農民には是非共學問の必要であることまで解せられたことと思ふ。

□程度問題がある

學問が農業に必要であることは先に述べた通りであるが、然しそれはまた程度問題である。何か種子を蒔くとそれが生えて成長する。これは何う云ふ譯であらうの、花が咲いて實が出来る。これは何う云ふ理由なんだらうなどと、普通、既定の事實であり、原則であると稱されてあること以上、突込で行つて其原理を研め様とするのは、それは哲學者のすることであつて、敢て農民が直接にそれ程まで深く研究する必要はない。

また斯くまで深くでないとしても専門家に任せる研究問題は澤山ある。要するに農民としては或程度までの學問をすれば好いのである。と云ふのは諸君は研究者で無い。應用者だからである。所謂農業技師であるのだからである。例へば此處に寫真なら寫真を業とするものがあるとする。研究者は其寫真の原理を研めて何處までも完全な寫真を製作する工夫をする。ところでそれを實地に作る人となると、所謂寫真技師であるから、或程度までの寫真に關する智識さへあれば良いのである。それと同様に、農民諸君としては、少なくとも専門的な研究をして、農業の大學者となること云ふ必要は無く、實地を行ふに極めて必要な通俗な智識を有してさへ居つたなら良いのである。

然し勿論深く廣く知つてゐるに越したことは無いのではあるが、凡ては經濟上から利害關係を考察して行らねばならぬのであるから、其處に程度問題が生ずるので

ある。

すると程度、農民として必要な學問の程度とは何の位なものであるかと云ふことになるが、それは中々六ヶ敷い問題である。或甲の農民と、乙の農民とでは其程度とする量が違ふ。また甲の地方の農民と乙の地方の農民との必要とする學問は質が違ふと云ふ次第で頗る六ヶ敷い問題である。此邊に一々それを述べ盡すことは到底不可能なことである。たゞ要するに修身學の如く、其實地に對しての「時」「所」「位」に依つて定めるより仕方が無いと思ふ。

たゞ諸君の誤らざる考察に俟つより外方法はあるまい。

□目的を忘れてはならぬ

農村と教育、農村青年と學問と云ふ問題に就いて、是非共云はなければならぬことがある。それは此の「目的を忘れてはならぬ」と云ふことである。若し此の目的

を忘れてはならぬと云ふことを忘れて了つて、學問を曲解することでもあると、前に述べたごとく、他人から「これだから農民には學問は要ら無い、たれそれも困つたものだ」と、斯う云はれて後ろ指を差されることになる。そして益々農業は時代に遅れ、何時まで経つても農民は頭が上がる時が無く、農業では飯が食はれぬこととで居なければならぬからである。

著者の郷里、秩父山中に在る農學校の卒業生などにも、随分此の目的を忘れた風の人々があつて、學校では、別に農業の教師だとか、農業の月給取にだとかする目的で教育してゐるので無いにも不懸、學校を卒へてから、小學校教師や農學校邊りの教師などになつて、所謂月給取で日を送つてゐる方なども多いが、眞に遺憾な次第であると云はねばならぬ。

要するに農村の青年諸君としては、帝國民の一員として必要な國民普通教育を受けた後、自己の職業上に應用することの出来る——活かして用ひられるだけの農業

上の智識を得て、學理を實地に活用することを爲し、其他は、日進月歩の時代に伴
 れて行かれるだけの常識を養ふべく、善良なる新聞や雑誌でも購讀する——と云ふ
 ことが、極めて必要であり穩當なことと思ふ。
 斯く云ふたなら、いさゝか本書の主意に叶はぬ様であるが、實は斯くしてこそ眞
 の目的を達し得るのである。詰り斯くて農、農業、農村、農民としての内容の充實
 を謀る。然して自覺すると云ふことが、取りも直さず諸君が起つて眞に農村問題の
 叫びを上ぐる爲めの第一階段であり、第一歩であり、またその全體なのであるから
 である。

□天然自然に學べ

農村青年諸君、余は前に都會に大人物の出現が無いことを云つた。また學問は宇
 宙の眞理、大自然の具有する法則であることを述べた。尙現今の教育そのものは、

此の眞理法則——それに従つて人間の生活に活用し、人生に益せんが爲めの手段で
 あり、方法であることを説いた。従つて余が此處に「天然自然に學べ」と云ふ問題
 を揚げ來つて説かうとするこの理由あることも肯かゝることと思ふ。
 諸君、諸君の住む所は人間味の少ない大自然の懷である。一切の萬物を藏し、あ
 りとあらゆる眞理を包藏する大なる寶庫であり、大なる學問所である。大なる趣味、
 大なる自由の如きは、悉く諸君の占有し、諸君の受くる所である。自由に思想し、
 自由に行動し得るところは諸君の住所である。道路より六尺以上離れざるところに
 放尿すべからず、何々すべからず——と云ふ、窮窟至極限りなき束縛に包まれた様
 な現代の都會では無い。幾多の醜汚、幾多の罪惡の中に狹まれ、寸時の安泰な生を
 送ることの出來得ぬ厭ふ可き都會では無い。見る物象の善美にして、聞く事柄の愛
 すべく極めて自然的な極樂境である。人爲的曲事の多い都會で無く、宇宙大生命の
 發現所である。

其所に住居する諸君は幸福であると云はねばならぬ。一河の流、一峯の姿にも幾多の眞理を語り、無限の美妙を示してゐる。咲く花、囀る鳥の聲、空行く雲、面を拂ふ風、萌ゆる若葉、やがては落ち行く紅葉其他一切の事物現象は、人類に絶えず無言の教訓を贈り、絶えず説教し、絶えず音楽を奏してゐるでは無いか。

人類が遊ぶに農村程好い處の無いと共に、また人類が學ぶにこれ程適富な場所は無い。世界に大多數の信仰者を有する釋尊は王城を捨て、ヒマラヤ山中に其大なる佛教の原理を學んだ。東洋の思想界に大なる根底を與へた孔子は支那大陸の自然に尤も多くものを收得した。トルストイはヤスナヤボリヤナの田園に最高の眞理を探り、乃木大將は幼年時代は云ふに及ばず老後を農村に親みまた學んだ。最近我國に渡來したタゴールもまた釋尊と同じくヒマラヤの山中に彼の大思想の根底を學び得たのである。其他クリスト、ナポレオン、ベルグリン……と云ふ人類界に大なる感動を與へ、大なる事業を爲し大なる生命を傳へ得た偉人傑士は悉く此の大自

然に學んだのではないか、大自然から得る處の多かつた方々では無いか、眞に尤も大なる學問を自由になし得るものは諸君である。農村青年諸君であらねばならぬ。人爲的加工をして、惨めな小さな箱様のものを造り、それに箝め込まうとする不自然な穢汚な現代の學校教育などを受けずとも、諸君は斯くの如く絶大無限の學園に住してゐるのであれば、其處に學ぶ非常な幸福を有してゐるのである。重ねて云ふ。眞に大なる叫びは田園——農村——其處から聲を發せねばならぬのであることを、無言は大なる雄辯であるその雄辯を示してゐる大自然に向つて自由に學び、尤も大なる叫びを上げる者は幾度云ふも諸君の外には無いのである。呷、大なる學びを爲し得る農村青年諸君は眞に幸福であると云はねばならぬ。

時代と農村青年

□現代の我農村

時代と農村青年、これ余の特に本書の中に特筆大書、大聲叱呼して我農村青年諸君の爲めに述べなければならぬ問題であり事項である。

「思ふ氣儘になるならば、金の實る樹を庭に植え、寝てゐて小便して見度い」と俗語にも唱つてゐた通り、因循姑息であり、小島國民的であり、沈靜であり、消極的であり、隱居ものゝ居眠り主義あつた哀れむべきものも、一朝、諸外國の來つて通商貿易を強ひられ、其處に眠を覺したと同時に、世界文明の有様を觀て、我の誤りを悟つた爲め、何でも蚊でもどしく輸入し、模倣した結果、平常着を捨て、他所行きの着物を着た小兒の様に、心の中まで思はず識らず變つて來て、扱

は同じ勝手な事を云ふとしても、

「思ふ氣儘に成るならば、汽車や電車を下駄に穿き、日本銀行懷中し、世界漫遊がして見度い」

と恚う謠ふ様に變つて來た、そして、現在の我國は什うであるか、諸君も知らるゝ通り今は世界に於ける六大強國に伍せられて、一等國と呼ばれてゐる。鎖國時代の事物は大方變轉して、明治から今は大正の文明開化を唱へてゐるのである。日本帝國の國旗は各國の國都其他に樹てられ、其國と同じ風に飄つてゐる。また大洋に遊戈する大小無數の戦艦商船などにも掲げられて悠々として航行を續けてゐる。日本と云ふ小島國の周圍を漸く經廻つてゐた木葉船では無くなつた。また、向ふ鉢巻裸體の動物的な雲助君に擔はれた釣籠の中に、首を屈めてゐた旅行者も、ビーと一聲の汽笛が鳴ればゴーと動き出し快速力で飛ばして行く汽車を初めとして、自動車、自轉車などの交通に變じ、果ては空中を驅せる飛行機とまでなりかゝつてゐる。袖

の大きい和服も多数は細い洋服に變つた。頭の毛も短かくされたり、分けられたり、女のそれまで彼の通りハイカラツて居る。燭油の行燈が石油ランプになり、瓦斯になり電氣になる。唐傘が洋傘になり、お膳が卓になり、正宗が五色の酒に負け相になつたり、醬油團子やアッコ餅が、森永のキャラメルになる。木造りの葛屋根の家が、石や鐵で造られたルネッサンスやセ、ツシヨン式などの建築に變る。何んな僻地までも行くものなどにも、飛脚が電信電話の様なものにまでなつてゐる。

今まで凡ての先生の様にしてゐた支那には反つて此方から種々と教へてゐる。戦争すれば勝つた。そして何億の債金を寄越せ、オイ其臺灣は此方の者にするんだ。と云ふ様で、遂には世界最大國の露西亞と戦つても勝利は此方にあつて其結果樺太を取り、朝鮮までも併合して了ふ。近くは獨逸を彼方に廻して戦争もする。先日(大正五、八、七)の如きは、露西亞と同盟に比ししい協約まで締結された様な次第、政治に、教育に、學術に、商工業に、何でも彼でもゴロリと變つて、先づ一寸大體に

於いて立派に一等國の體面を保つてゐる。

ところで我農村を見ると何うか、實に情け無いものである。依然として鎖國時代の其儘である——と大體に於いて見ねばならぬのは實際情けない次第と云はねばならぬ。我農村を觀て涙をコボさぬ人間があつたなら其人は恐らく何うかしてゐる——と云ふ有様では無いか!!、それだから、我農村問題は今や我國上下の

□重大最大問題

なのである。尙少しく云つて見よう。我思想界などは何うであるか、我國在來の神教、印度哲學の佛敎、支那の儒敎などで固められてゐた我思想界も、維新と共に輸入された英の實利主義だの米の切利主義だのヤレ何のかの云ふそれに依つてメチャクに破壊されて、人生觀とか宗教問題とか云ふ方面までも大部變つた。それが爲めには、祖先傳來の佛様や神様までも擔ぎ出して川に流して了ふ。果ては最初

に文部大臣に成つた森有禮など云ふ人は、畏多くも伊勢大廟に参拜の節、ステツキで御門の扉を開く様な非國民的なことまでもして、遂には舊劇の鬼婆でもあるまいに出齒庖丁を持つた奴にやつつけられる様なこと迄した。また西洋の物でさへあれば何でも良い物と買冠つて居た結果、ライスカレーシユと云ふ一種の菓子の名を聞いてさへも「ヘーライスカレーイ氏、それは何を發明した人ですね吾々の住んで居る地球の圓いのを此の地球に居て見ることの出来る不思議な眼鏡を發明した方でありますか」など云ふ次第になつたので、これでは不可ん、我大和民族特有のものに全部消えて了ふ、そんなことではならぬ——と云ふ事で彼の井上圓了博士などが先きに立つて、東洋哲學に根底を置いた高等教育を目的とする學校を開くに至つたなど云ふ次第で、我思想界は早くも明治十七八年から廿一二年頃に至つては、既に西洋謳歌熱から眼覺めて居た。それであるから現今では世界で何んな學者、詩人、哲學者など云ふ人々が來ても、たゞ傑い者だなど、讀め立て、許りは居ない、欠點

があればどしどし遠慮なくケナシもする。攻撃もする。非難もする。其上此方から時に依ればそれ以上に教へてもやり兼ねないのである。
 眺つて我農村を観れば何うか、初めに眼を覺して何でも彼でも取入れたが、これはいかんと又二度目の眼を覺したり三度目の夢から覺めたりするどころでは無い。まだ維新前の夢からも漸く覺めかゝつて居る位ではないか、それだから何時までもヒュー／＼で通して行かなければならぬのだ。他人が甘い汗を吸ふから俺も一つと百姓の鎌を放り出して都會に出て種々のことを行つて見る。一寸見は如何にも眼を覺した様に想へるが、然しそれは眞に目を覺したのでは無いから、其多くは失敗に終つて了ふ。田舎の土百姓からすぐに大都會の競争場裡に飛び出して勝つことは得られ無い。甘い汗を吸ふことは出来ぬのである。

□ 静思熟慮を要す

前に述べた通り我農村は時代遅れである。其爲め現在商工其他の文明が、恰度維新前に於ける先進國の船が海岸に來つて、我れに通商貿易を強ひた時代の我國當事者の態度の様でもあり、そうかと思ふと、また、明治の初期時代の我國文物のその様にもなつて居る。

老人の多くは「イヤ百姓に學問など要らぬ」と云つて居る傍から息子さんたちはどしどし物質文明の恩澤に浴する心算りで、金縁の眼鏡をかける。ゴールドの時計を持つ、頭毛を分ける、香油を塗る、香水を芳して居る。下駄を放ち出して七八圓も出した靴を穿いて和服を着た一種のボンチ畫までも出現して居る。「スゲ傘などでは何處へも行け無い」など、云つて、ステッキ代用の細巻の洋傘を買ひ込む。刻みのはぎではいけ無いと云つて白梅にしまた巻莖を飲む、と云ふ具合で、何方もドチラだから其處に忽ち大衝突を來して、

「親の財産的にすりや、やかん頭が邪魔になる。親爺入る様な火消帯熾るたんびに

蓋をする」

と云つた様な新舊思想衝突の舊を厭ふ様な歌までも唱ひ出して居る。

そうかと思へば一方では、好い年をした親爺までが先きに立つて、黄金の時計も持てば、眼鏡もかける。大正藝妓も買へば五色の酒も何々の鐘詰を肴にして飲む。經濟的打算も何もそんなことは其方退けにして耕地整理もやれば状々の新しい肥料も買つて使用法などは知らうが識るまいが叶はずにどしどし使用する。そんなこんなで少し自家の財産でも減ると、女や酒や肥料や贅澤品などで費した金までも皆な農業の割に合はぬことの中へ數へ込んで「何うもこれはいかん、百姓では駄目だからよしとつ相場を行つて見る」など、云つて、少しも相場野線學上の智識など無くとも、そんなことはお構ひ無し、商業新聞で見たとか、或は普通新聞の四面や八面の經濟記事で一すいゝ見て居る位のことでおまけに初めから何萬の金でも直ぐ儲けられる位の考へで、大金を投じて相場に手を出す、宛然日本最初の文部大臣

になつた森有禮の非國民的大非禮行爲や、彼の菓子の名を聞いて、地球を見る眼鏡でも發明した人と誤解した位のことを行つて居るでは無いか、何うしてこれで他の文明に伴つて行くことが出来やうぞ、日本が世界の一等國になつて、先進文明國と肩を並べて歩く様に、我農業が他の商工業などと肩を並べて歩ける道理が無い。我國明治維新前後の危険なかつた様に、全く現在の我農村は死活の間に彷徨して居るのである。ところで、我農村を活かして行くべき者は誰であるか、本書の初めに於いても既に述べ來つた如く、云ふまでも無く其重大なる責任は、農村を負つて起つべき我農村青年である。眞に諸君よ我農村が、斯くまで時代に遅れて居ると云ふことを、此處にも眞に自覺して貰はねばならぬ。

で維新の我國が眼覺めた様に、我農村は自から目覺めねばならぬ。目覺めよくと警鐘を亂打する維新前後の諸外國の様に、諸君の周圍には、商工等と云ふ分明國の軍艦や商船が澤山に包圍して騒いてゐるでは無いか、また、其の覺醒は、我國當

事者が開國した様に、我農村の諸君自から目を覺まさねばならぬ。何と云つても、我農村の心配するのは、我農村青年諸君を置いて他に求むることは出来ぬ。嘗て一休和尚も云はれた通り、
「我身をば 我程誰か想ふべき 我れと案じて我れと教へよ」
である。何うあつても我農村諸君が第一に自からを省みて奮然起たねばならぬことは既に幾度も云つた通りである。

□時代に對する青年の覺悟

扨然らば何うしたならば良いか、何うしたならば我々農村青年は我農村を活かして行くことが出来るか、時代に斯くまで遅れてゐる我農村を——後になつた鳥を——何うしたならば先きに立てることが出来やうか？ 何うしたならば時代遅れを先進したものに爲すことが出来やう、これ諸君の一大疑問であり重大難關である。

それには我農村青年の大なる覺悟が必要である。諸君にして大なる覺悟があつたならば「岩をも通す桑の弓」必ずや此の衰微廢頽極まり無き我農村——大病人である我農村を治することも出来る。朝陽の昇る快い甘露臺上に載せることも出来るのである。大なる覺悟を持つて、大なる勇猛心を起して進んだならば、其處に必ず安宅の關所に於ける辨慶の智慧も出やう、ジエムス、ワットの蒸氣機關を發明した智慧も、またニュートンがリングの落下に發見した宇宙の眞理、地球引力の發見の快味ふことも出来ることは期して待つ可きである。

農村青年諸君、眞に沈思熟考を要す。また大なる覺悟を要し、大勇猛心を起して貫はねばならぬ。そして恰度、井上博士等が、我大和民族の特性を失はぬ様、東洋學復興運動を起された様に我農村の特質を保存し、其本性を發揮することに懸身の努力を注いで貫はねばならぬのである。

扱然らば我農村青年諸君は、此の日に——時々刻々極まり無く、進み行く時代の

趨勢、時代の推移に對して、何の様な覺悟を持ち、何の様な手段方法を以つて進んだら好いか、以下少しく項を別けて漸次に其説明を續けて行くことに致さう。

□これ根本問題である

我農村青年諸君は現在種々な眞似を行つてゐるが、これが尤も忌む可きことである。教育家の眞似をやる。學者の眞似をやる、政治家の眞似をやる——と云ふ具合ひで何でもかでも眞似をやつてゐるがそれは良く無い。百姓は百姓らしくなからねばならぬ。

眼が勞れない爲めに、または既に近視眼になつてゐる爲めに——書籍を讀む人がかけ、仕事をする人が懸け、または、其他の實際必要な人々が眼鏡をかけてゐるのを見て、諸君は直ちに眞似をする。學者とか學生とか、又は其他の人々の眞似をして必要の無い農村青年が無暗に猫も杓子も鼻目鏡をかけて好いことにしてゐる。甚だ

しいに至ると、近視眼でも無いのに、其真似をして近眼鏡を得意然としてかける——またそたが百姓の息子の誇り位に思ひ誤つてゐる。香水を持つ、香油をぬる。そんなことは種々な外交員の様な職業の人々とか、演劇の役者とか其他何でも彼でも、多く人に接し、其對手の人々から好い感じを受ける様にしなければならぬと云ふ種類の人々がすること、土を相手にする諸君に於ては更に必要の無いことではないか、それを諸君は猿公然として他人のするのを見ると直ぐに、其精神もしらないで、真似をしてゐる。そんなことは寧ろ滑稽では無いか。然し「然うしないと良い女が惚れて呉れぬ」恚う云ふ諸君があつたとすれば、それこそ所謂其青年はお芽出度ひ人間だ。何右かと云ふと、香水や香油、眼鏡や時計、そんなものに惚れる様な婦人は、官吏や軍人學者……など其他種々な人々の妻君とし奥様としてこそ必要であるかも知れぬが、少くも我々農村問題の研究をし、我帝國の農村をして完全無欠なものとし様と云ふ、著者や農村青年諸君には更に——そんな婦人などは必要は

無い、土臭いまた太つた大きい手を見て「あ、これなら私の一生を共にすべき真の農民である」と思つて来て呉れる婦さへあつたなら好いでは無いか、何もそんな女に好んで此方から惚れて貰ふ様にする事などはテンデ瓜の垢程も無いのである。また中には手を白くしたり、細い手を持つてゐると佳い様に思つてゐる青年が、我農村の中にもある様であるが、實際憐れむ可き弱青年である。そんな遊治郎君の真似などは、此大責任を有し、大覺悟を持つて奮闘せねばならぬ我農村青年には更に——少しも必要は無いことである。

「貴方ハン真個ニキレイドスコト、妾ホン真に……」

などと相手の女に好かれ、朋友から羨まれ様とする、家も身も亡ぼし、國家を害する毒虫とも云ふべき遊治郎其人にこそ必要があるので、事實我農村青年は反て土色した太い強張つた手であつたなら必要なのである。そんな遊さんの真似は絶對的禁物である。

靴でも然うだ、傘でも然うである。其他あらゆる凡ての諸君の周囲を圍んでゐる——包んでゐるそのものは、諸君よ、多くは諸君は他の真似をしてゐるのである事を考へねばならぬ。それなら何うしたならば良いかと云ふと、

□百姓は百姓らしく

と云ふことにすれば、それが何よりである。恚う云つたところで、又直ぐに「それでは百姓らしく、何も見ず、何もきかず、今までの百姓の様にしてゐなければならぬのか」と誤解してはならぬ。余が前に、靜思熟考を要すと云つたのは、所謂其處にあるのである。要は農村青年として、眞に事實必要なものはどしどし受入れられるがよい。僅か五六十年の中に、世界の一等國に列することを得た我國は、前に述べ来た如く、随分と種々状々のものを悉く受入れたのである。然し、非禮を行ふ文部大臣を出し、菓子の名に敬服する様な馬鹿氣たことをしてはいかぬと云ふことなのである。

る。

文明の恩澤は、種々なる有益なるものも又無益なる物をも賣すのであるから、其有益なるものを取つて無益にして害あるものは避けよと云ふのである。余は我農村青年諸君に向つて、凡てのものを捨てよとは絶対に云はぬことを斷言しておく。農具の新式のものゝ來たと聞いたならば、先づ此地方の農民とし農業として實際に適してゐるや否やを充分調べて見て、事實佳いとしたならば、どしどし買つて使ふもよい。又新しい佳良な種子があると云つたならば、前の様に調べた上、眞に適當佳良ならばドン／＼買込んで植付けられるもよい。此の場合に於いても、只一寸佳い位のことに、直ぐに大した乘氣になつて了つてはならぬ。随分よく經濟上の點なども考察した上で無いと忽ち損害を受けることなども少なくないからである。

詰り、假に我農村諸君をして、河水の汎濫した場合に薪取りにでも出て來た人と例へて見ると、其濁流にはドシ／＼種々雑多なものが流れて來るが、それを何でも

彼でも皆引揚げてはならぬと云ふのである。何處までも「吾は薪を得んとして來た者である」と云ふ目的を忘れず、薪となるもの薪となるものを引揚げて行かねばならぬ。偶々土左衛門が來たがこれは可哀相だ、揚げて置いては手数はかゝるが仕方が無い、何かの因縁だらうと云つて引揚げて置いて引取人が無くつて已む無く吊つてやると云ふ位のお情けはあつても良いが、ソラ犬の糞が來た。これはぼろだこれでも引揚げろ、彼れも引上げて皆上げて了つてならぬのである。

惣う云ふことを事實の上に直して見たならば、縣廳や郡役所などから村役場を経て種々と農業上に注意して來たとする。其時、それが、事實上餘り有益で無いとしても、お上からの命令だからやらう位に行ると云ふ程度のことは良いが、「ヤア最新流行の時計が來たよ。天賞堂の今度の賣出した、よし／＼買つてやらう、俺の持つてゐる様な廿二形のこんな古臭いのは、大正の青年には似合は無いから……」など、云つて、正格な時間を示して呉れる事實は善良な堅固な其時計は捨賣りにし

て、業々直ぐに天賞堂の賣出品を注文すると云ふ様なことをしてはならぬと云ふのである。

□手の大きい人は大きい仕事をする

惣う云ふ諺が何處か外國に有つた様に思ふが、實際我農村青年としては斯くあり度ひのである。また斯くあらねばならぬのである。

何處までも百姓は百姓らしく、大なる働きを爲し得る太い手を誇り、代金も安價であつて、其實反つて實用向きな、凡ての農民に適當な器具機械を持つを以つて誇りとする様でなからねばならぬのである。

文明だ、開化だ、新式だの流行だのと云つて、神經過敏に騒ぎまわつて遊んでゐては仕方が無い。何も其騒ぎ廻ることそのことが、時代に伴つて行くのでは無い。凡ての流行、凡ての新式など云ふことの中に含まれたる精神その物を捉へねばなら

ぬのである。

農村の青年諸君、諸君の太い強張つた手を誇り得らるゝのは、恰も砲火に損した聯隊旗が其戦闘に於ける苦心慘澹大なる功勞を爲したことを表示して、誇り得らるゝのと同ー理なのである。諸君は官權の許す限り、大いに盆踊りも行るがよい。たゞ時代に後れず、時勢に伴ふて、淫卑を避け人生の眞を唱つた戀愛美の歌を自から作り、而して謠ふがよい。また田園の美を讚し、或は世界的日本農民の本分を表象するその文句を見付け出して謠ふがよい。これらはほんの一例に過ぎぬのであるが、諸君は現在の世界的大日本帝國の臣民であり農民であることを忘れず、而して時代の推移と共に、進化して行くことを勉めて、徒らに他の人々の眞似をせず、時勢の精神其ものを取つて持つて我ものとしつゝ進めばよいのである。重ねて云ふ、大なる手を以て農村青年の誇りとする様にせねばならぬことを。

□世界的の耳目を養へ

既に述べた如く、我農村は世界の日本農村であると同時に、諸君は又世界の日本農民であることは云ふまでも無い。従つて、時代に後れず行かうとする努力——また後れてゐるのを先きに出様とする努力には、何うあつても現在は世界的の耳目を養ふと云ふことが、我農村諸君にも必要である。

吾々は現代に在つては、凡てが世界的になつてゐる。一寸思ふとそんなことは無い様に思へるが、實は全く然うなのである。例へば、一とつの饅頭であつても、それが既に世界的の食物では無いか、メリケン粉と云ふ小麦粉は亞米利加から来る。それは英國や獨逸などで發明した機械で、小麦を粉にしたものなども幾許もある。砂糖は熱帯地方から来て居る。少なくとも我國であつたにせよ、半は熱帯圈内に在る臺灣邊りから来て居るものである。それであるから、之を世界的饅頭だと云ふことが

出来、またそれを喰ふのが世界的な喰物を食ふとも云へるのである。
 斯様な次第であるから、吾々が今後の生活を行ふことの上では、是非共世界的の
 目や耳を持つてやつて行かなければならぬのである。

近頃は農業に使用するものでも凡ての金屬製品の價が上つてゐる。と云ふのは金
 物の價が世界的になつて居るからである。開國前の日本にはそんなことは無かつた
 が、今では凡てが恠うなものである。何故と云ふと、歐洲諸國の大戦争で金物を非常
 に澤山使用する。それが爲めに我農村で使ふ諸道具の金具類まで價が上つたのであ
 るからである。凡てのことを斯う解いて行くと、現代の事物は、悉く世界的だとも
 云はれる。世界的な事物の中に生活して行く吾々に、世界的な耳や目の必要なこと
 は益々明白であらう。

然し、一寸考へて見ると、現代の人間は皆な世界的に物事を見聞する明を持つてゐ
 る様にも想はれる。けれど、其實中々世界的な耳目を確かに持つてゐると云ふ人

人は、特に我農村の諸君などの間には實に少數であると云はない譯には行かぬ。

で今後の我が農民諸君は、是非共此の世界的の耳目を持つことに餘程力を注いで
 貫はなければならぬのである。これも、我農村をして充實させ、他日他に向つて農
 村の眞實を語り、爲政者などに對しても充分農村へ向つて眞の同情をして貫はうと
 する叫びを上げる爲めには何處までも必要なのである。

□健全なる常識が必要

世界的な耳目、世界的な常識——と云つたところでそれは時代に並行して行く完
 全な常識と云ふものである。現代の學校教育の様な、専門的であり、箱詰め主義で
 あり、實際的で無い様なそれから得た智識でも無く、またそうしたもので無い。活
 用的であり、實際的、實利的で、不健全で無い智識である。それが必要なのである。
 然し恠う云ふと、重ね々現代の學校教育そのものを、余が非常に攻撃する様で

あるが、それと云ふのも、事實缺點が多いから云ふのであり、且つ又其現代教育を多く受けることの叶はずして悲觀する我農村の青年諸君をして失望させない爲めに云ふのであつて、必ずしも現代教育そのものが、全然悪いと許り云ふのでは無いことを承知して置いて貰はねばならぬ。云ふまでも無く、現代としては、尤も佳であり善であるとする方法を以て現教代育は行はれてゐるのである。従つて、これを受けることが出来れば、それに越したことの無いのは勿論のことである。——けれど、中學に入り、大學に進んで、専門學までも研めるとか、農學校に學ぶことが出来得ないからと云つて失望することは無いと云ふのが、余が云はんとする處の本旨なのである。

筆は思はず横道に走つたが、扨然らばその世界的な耳目を持つと云ふ世界的な智識を得ること——其の健全なる常識を收めると云ふことは、何うしたならば出来るか、何うして收めるか、これは頗る六ヶ敷い問題である。

常識——は曰く常識である。學識とか智識とか云ふものと違つてゐる様である。活社會に活動する人物を造り出す爲めに教育する學校、其處で教へてゐるものは常識とは云つて居ない。學識——智識など、云ふ。そうすると學識とは何んだ常識とは何んだであるか——斯うなると頗るこれも六ヶ敷いものになる。然し世の中のこと、多くはたい相對的に差別を付してあるのであつて、何處までが學識であり、何處までが常識であるかと云つて、實際に於いては區別することは出来無いのである。詰り境界無き差別を何して置くのであるからそんなことは何うでも良い、此處ではたい、曰く常識——と云はれる様なものを得る、收める——と云ふことを出来る限り説いて見やうと思ふ。

□新しい報導に注意する

常識を修める——また、そして時代に遅れ無いことにする。——と云ふ上に於い

ては、先づ此の「新しい報道に注意する」と云ふことは第一番に數へべきことだと思ふ。

吾々の住んでゐる此の地球に居る人類、其十六億を以て算する人間の世の中には、時々刻々に新しい事件が數限り無く起されてゐる、また起つてゐる。それがまた、新聞とか雑誌とか云ふものに依つて、日々一般の人々の間に報導されてゐる。それを一々出來得る限り注意して見る——聞くと言ふことが随分と必要であると共に、また此の常識を修める——養ふと云ふことになるのである。

然し、新聞や雑誌、それ等のものを一々毎日見ると云ふことは頗る六ヶ敷いことである。我日本國の主都東京で發刊されてゐるもの許りでも、日刊新聞が既に大新聞許りでも二十を以て數へられてゐる。尙其外にも一と月や二た月、或は半年と云ふ具合ひで、出たり引込んだりするものも澤山ある。雑誌でも然うだ。毎月定期發刊の雑誌許りも東京だけでも六七十もある。(其他一般普通の單行本が毎日々々續續

と出てゐる)。それを一々皆んな見るてえことは、何んなに精出して讀書の達者な方が廿四時間全部寢ずに讀んだところで讀み切れたものには無い。世界一二と云ふ出版物の多い我國の出版物、それを悉く讀む必要も無い、また讀んだところで、それが常識の修養であるとは云はれない。常識は其時代に、其位置に、又其職業の人が、毎日々々直ぐに活用することの出來る智識と云つた様なものであるから、前にも云つた通り、そう／＼澤山の新聞雑誌や本を讀ま無くも良いのである。

然しそ澤山で無い、少數、としても、我農村青年諸君が、浮々してゐると喰ふことも出來得ぬものが求めて讀むと云ふことは、第一黄金問題から不可能だ——と云ふかも知れ無いが、それは諸君の奮闘に待つより外仕方が無い。又出來るだけ——精々と云ふのである。三人して一新聞——五人して一雑誌、或は十人二十人して一新聞一雑誌を取るのでも良い。そしてそれを共同で見るのである。ところでそれは又勞力上不可能だと云ふかも知れぬが、又これも諸君の勇氣の

如何に依る。成程家と家との間が三寸や五寸、又多くて橋一本道一重離れた市街地で始終店頭に座り込んでゐる様な人の運動になるからと云つて、行つたり來たりする様な譯には行かない。然し、それも店に依ると、中々商店や會社に座つたり腰懸けてゐるのであつても農業労働以上なものもある。又都會に遊學してゐる學生でもあると、酒も飲む女も買ふ、玉突きもやる、散歩もせねばならぬ、芝居も見る、活動寫眞にも行く、女學生と交際もする、道を歩くにも安心しては歩るゐては居られぬ。それで勉強もせねば今度の試験には落第だ。親元から學資が來なくなつては一切は破壊だ。何うも忙がしい、何も心配でならぬ。先づザツと恁んな具合ひであるが、斯う云ふ人々と比べると、激しい長時間の労働をする農村の青年諸君の方がまだ餘程讀書も出来るのである。

凡て物は不可能だ、インポツシブルだと云つて了へば、凡てが不可能でありインポツシブルである。出來得ぬことも、すれば案外出來得るのである。諸君は黄金上の

ことも、身體上のことも餘程全精力を注いで行つて貰はねばならぬのである。既に先きに述べて置いた通り、田園生活は人間を知らず識らずの間に怠らせる境遇なのであるから、反つて諸君は其境遇を支配する様にしなければならぬのである。

□注意する上の注意

注意する上の注意など、云ふと、如何にも六ヶ敷い様であるが、事實は六ヶ敷くもあればまた案外造作ないものでもある。日日十六億の人類の中に起る出來事、それを報導してゐる新聞とか雑誌其他のもの、記事、それをたゞ其まゝに見なければ良いのである。

先づ第一に其出來事が事實であるか否かを考へて見る。と云ふのはそれ等の記事の中には随分とある事無い事を一部の人人が爲めにする所あつて書いたと云ふことが澤山にあるからである。

次ぎには其出来事の中で何處が尤も重要な事項であるかを考へて見る。例へば何國の議會で何う云ふことが議決されたとする。とそれは何う云ふことから其のことが議決されたかを考へて見る。また三面記事の様なものであつても然うだ、人殺なら人殺しがあつたとすると、何う云ふことから加害者がその行爲をする様になつたかを注意すると云ふ風に、凡て、其の中の重要條件は何處にあるかを考究するのである。

また今度は、それが何う云ふ風に或ことと關係するか、してゐるかを考へて見る。例へば某國で日本人排斥案が議會で議決されたとすれば、それは國際問題上何う云ふ關係があるか、また我國發展策の上は何う云ふ影響があるであらうか、經濟上何うあるであらう。教育には何うか、我農業上農村の人口増加などは何う云ふ風な關係があらうか、など、考究して見るのである。また人殺しでもそうである。其人殺しが實故であつたとすれば生活問題との關係は何うか、社會政策上何うか、

或は其人が近頃田舎から都會に上つた人とか、田舎に於ける人の間に起つた事件とすれば、我農村とは何んな關係があるか、など、考察もして見ると云ふ具合ひなのである。

凡て其出来事の中には、何れだけの眞實があり、世の中に何う云ふ關係があり、何う云ふ影響を及ぼすかと云ふことを注意して見ることが肝要なのである。

世の中の出来事とは、皆何等かの太い糸、細い糸に依つて吾人の生活生存の上に幾分かの關係を有してゐるものであるから、それを出来得る限り注意して見ると云ふことは、吾人人類の生活の上に必要でもあり、また此の常識修養の上に在つては特に重要な事柄なのである。

激しい日中の勞働から歸つて、一家揃つて晚餐の食膳に向ひ、楽しく食事を済ました後、或は暑い夏の日中の一二時間などを、近隣の友人とでも會して、悠う云ふ風に凡てのことに注意して讀み、且つそれを語り合つたならば、随分と楽しい事だ

もあり、其楽しいことの中から、又時代遅れとならぬ様に、諸君はそれに依つて自分の常識を修め得らるゝのである。

□旅行に見聞を得る

健全なる常識を修め得ると云ふ上に於いて、此の「旅行に見聞を得る」と云ふことはまた頗る重要なことである。古い言葉であるが、全く「百聞一見に如かず」と云はざるを得ないので、我々は出来得る限り實地に就いて見聞すると云ふことが必要である。井の中の蛙の見た世界は實に狭い世界である。茅の髓から眺めた空は極めて小さい空であつてほんの一部分に過ぎぬのである。また何れ程良く、此の世の中の事件を日々に報導する新聞雑誌などを見て考へてゐても、それではまだ實に哀れむ可き程度のものになつて了ふ。眞に健全な常識と云ふものは、到底それ位ものこからは得られぬのである。吾々は何うしても、眞に近い健全な常識を得様とする

には、矢張此の旅行に見聞を得る——旅行に依つて見聞を廣めて行くと云ふことなども甚だ必要なのである。

然し乍ら、「飯も食はれぬ」我農村青年諸君に「斯くの如く旅行は必要であるから皆諸君も多く旅行を試みるが良い」と云つたところで、それは全然不可能である。たゞ「成る可く」と云ふより外到底仕方は無いのである。そしてその「成る可く」を出來得る限り活かす——活きた旅行を行ふ——無意義に了らぬ様にする——と云ふ方法にするのである。

嘗て長野縣南信伊那の某る青年會員などは農業労働の餘暇を利用して痛快な旅行を行つたことを余は其會員から聞いたことがある。會員中には相應に資力のあるものなどもあつた。然し資力を利用して旅すると云ふことになると誰でも行ふ。それ許りか現今の旅では普通の旅行であつたならば、以前と違つて反つて愉快なもの楽しい面白いものとなつてゐる。そんなことを樂に行つたのでは我々青年には益が無

い。寧ろ一とつ突飛な旅を行つて見やう、と云ふ相談が出来て、各々會員は各二日分の食料として握飯を持つたが、二日切りの旅行で無いのだから其餘の食物は往つた先で米や麥を買つて、土地々々の役場か青年會の會員でも尋ねて、其處で釜を借りて煮いて食ふ。また残りを握飯にして持つ。そして一切宿屋には泊ら無いで、何處か人に迷惑を懸け無い様な山林の中で野宿すると云ふことにして、各自が一枚宛の毛布を持参した。

目的とする處は、各地方の耕作の状況を見聞したり、青年會の活動とか、自治の有様とか、何でも農村青年として必要な一切の物事に就いて、出來得る限り参考を得る様にと云ふのであつたと云ふ、然うして遠江に貫け、三河に入り、豊橋の軍隊に郷里出身の兵士を訪ね、尾張に廻つて歸郷したが、其間随分と多くの新しい經驗と見聞とを郷里に齎し得て、有益な結果を收め得た。尙其旅行中、豊橋の軍隊を訪ねた節などは、其事が聯隊長の耳に這入つたので、それは頗る好ましい青年である、

吾輩が一とつおごつて行るから一と晩泊めてやるが良いと云つて、聯隊長の命に依つて一と晩兵營に泊めて貰つた。其上、種々と聯隊長からはお話しがあつたり、質問して下さつたり、食物なども大ぶ御馳走までされて、一同は無上の愉快と光榮とを與へられたと云ふことであつた。

余は前に諸君に對つて「真似」のよく無いことを云つた。然し此の青年會員の旅行の如きは我農村青年諸君の大きいに真似て貰い度ひ事實である。此の真似を行らるゝと云ふことにあつても、たゞ其形を真似ずして精神そのものを味はれ度ひのである。

□我國農民の旅行

此の我國農民の旅行と云ふことに就いて少し述べて見やう、古來からのそれを説く必要も認めぬから此處には現代の代表的のものを揚げておくことにするが、我農

民の旅行は、實に無意義とも云ふ可き頗る貧弱なものである」と云ひ度ひ位いである。

働きの旅行 出稼ぎ金儲けの旅行は後廻しにして、先づ、娯樂と信仰の旅行から述べて見やう。伊勢参り、三山廻り、見物の旅行、湯治など云ふのが此の部類に屬するものであるが、其實際はたゞ眞個に其第一目的の上に幾分の注意を拂ふだけであつて、同時に何の困難も苦痛も無く、容易に得られるものを尠しも得やうとして勉める人々が無いと云ふのが我農民の此の旅行の實際であると思ふ。勿論、信仰の旅行などでは、他の事に注意を拂ふ様な事では、神様が御利益を與へて呉れ無い、と恚う思はれるかも知れぬ——また事實然うした傾向が無いことも無い様に心理學上からなども觀られ無いことも無いが、然し神様佛様などは、決して然うした同情の無い方々では無いと思ふ。

神佛のことに就いては後に信仰の問題を説く場合に譲つて置くが、何せよ、此の、

信仰とか、娯樂とか云ふ場合の旅行に就いても、途々に於ける總ての見聞を有益なものとするに云ふことに勉めることは是非共何人にも必要であると思ふ。

また、考へ方の如何に依つては、利益と云ふ許りで無く、それと共に大いに此等の事物の見聞と云ふことに依つて、愉快を得ることが出来るのである。それは、金なら金、道具なら道具と云ふものを、自己のものにし、またそれを多く貯へると云ふことに依つて、大方の人々が一種の愉快を得て樂しむるのであるが、旅行中に於いて得らるゝ多くの見聞に、深い注意を拂つて、それに依つて我が農業上に、種々な利益を得られたならば恰度金を貯る人、道具を多く求める人々が、其の金を見、道具を觀て一種の樂しみを得らるゝと同様、大いにそれに依つて樂しむ得らるゝのである。

斯様な次第であるにも不拘、其利益を得ることをせず、其樂しむ得らるゝことをせぬと云ふ多くの我農村の人々の旅行が、至極貧弱なものであると云ふことは、何

人にも明白なことであらうと思ふ。
 出稼ぎ、また其れと同様な様ではあるが金儲を目的とする旅行も、我農村の人々の旅行は、これ又實に憐れむべき貧弱なものであることを余は痛切に遺憾に思つてゐる。

我國の農村は、勞働の平均と云ふことの比較的少ない爲めに、各地至る處幾分かの農業の閑な期間がある。従つてその期を利用して何か一定の副業を行るとか、或は行商に出かけたり、又は一定の土地へ行つて働く出稼ぎと云ふ様なことを行つてゐるが、それが、尙より以上に利益あるものとする事が出来得るものを、至つて僅かな利益に満足してゐるのが、我農民諸君の現在である。實に遺憾に堪えない次第であると云はねばならぬ。

我農村の斯かる人々の旅行が、常に然うしたものとなつて、娛樂や信仰の旅行も、出稼ぎ金儲けの爲めにする旅行も、全然盲目に終ると云ふことは、それ自からが既

に常識の貧弱であることを示してあるのであるから、常識修養の資として旅行に依つて見聞を廣め常識の修養に資すると云ふことは、甚だ不可能の如くに見え、また一面、常識修養を積んだ後に、旅行してこそ初めて旅行をして、意義あるものとし、有益ならしむることが叶ふと云ふものにもなるが、然しそれは一理ではあるものゝ、全部の眞証では無い。詰り旅行すれば自然に見聞の利があり、従つて常識を昂められ、従つて總ての事物に對する興味も、趣味も養はれ、注意力も生じて、其處に利するところがあると云ふものになるのである。それに就いて斯かる我農村の人々の如き、盲目者の多い旅行に於いても、相應なる効果を收めてゐると云ふ實例を次に少しく参考までに述べて見やう。

□旅行の益ある實例

此處に旅行の益ある實例と題しても、旅行者其ものは、全部農民であるか、乃至

は農村の人々であつて、其人々の齎す利益であることは勿論である。廣い意味の一
般の人士の旅行と、其利益とに就いてでは無い。

又農民の旅行と云つても、信仰の旅行と、娯樂の旅行と、金儲の旅行とに依つて、
旅行する人々の多數な地方と、少數な地方とは我國の農村としても既にそれに依つ
て異つて居るが、それ等を一々上げ來つて説くことを止めて、此處には代表的であ
るもの、且つ旅行する地方の人々と、旅行者の少ない地方の人々とを比較して述べ
ることに致さう。

これは主として金儲を目的とする旅行者であるが、先づ越後の人々は頼まれれば
關東へ米搗きにまで來ると云ふ言葉は昔からある。ところが、現今の如きは、頼ま
れ無くともドシ／＼關東地方に出て來て、或は關東許りで無く日本全國各地にまで
出稼ぎしてゐる。次ぎの越中は何うか、富山の賣藥行商の人々を初めとして、こ
れ又多數の旅行者を出してゐる。次ぎの加賀、石川縣は何うか、能登半島人は農民

としては比較的旅行する人々は少ないが、加賀になるとこれ又多數の漆器行商、或
はそれに要する材料の漆取りの人々が中々多數各地に旅行する。其次の越前は何う
かと云ふと、此處も又、金屬製品の行商者などが多數各地に出かけてゐる。
斯様に北陸地方などは澤山の農村の人々が大體冬期の雪國の農村として、餘暇の
多い期間を利用して、各地に旅行してゐる。従つて彼等旅行者は多くの新しい見聞
を得て歸る。

「オイ田村君、何處其處では憚う云ふ方法で行つてゐたぞ、それで實績は頗る佳い
と云ふから君一とつ行つて見給へ」

「イヤまだ僕等の方では空地が至る處に多くあるよ。何縣の何郡邊りでは憚んな風
にそれを利用してゐたよ」

「何うも我々の村の人たちは實に働き方がまだ實際實を入れたものでなかつた。何
處の農民は憚んな風に懸命に働いてゐたぞ……」

など、歸郷の度毎に新見聞を語る。そんな風で其地方農民は相應な自覺もする、奮起も持つ、従つて勢ひ次第に充實したものとなる。斯様な次第である。

ところが、東北地方などになると、加工品などの副産物が少ない、従つて多くの行商人なども出ない、また交通機關の發達の遅れて居ると共に、冬期間出勤するとしても働く可き個所へ至るまでの距離が遠い、それ等種々なる關係から旅行者は至つて少數である。爲めに東北人士の見聞は實に狭いものと成つてゐる。到底北陸地方の農村の人々に比較する時は、お話しにならぬ位である。爲めにまた、北陸地方の農村の充實に對して、東北地方の農村の不充實であることは云ふまでも無いのである。

我農村青年諸君、此の旅行者の利と云ふことに就いても、尙種々と述べ度ひけれど止めておく、余の説いたところは實に尠ない。けれど諸君は此の僅かな説話の中から成可く多くの得る處を見出されて、諸君の利益となされ度ひのである。

尙、諸名士の講話、これを成るべく多く聞くと云ふことは、大に利する處の多いことは諸君も知らるゝ通りである。これまた成可く多くして常識修養の資となされ度ひと思ふ。

余は各地漫遊中、農村などで諸名士の講話などに會した事も可なり多數あるが、其節、何時も一聴衆の甚だ少ないことを觀て實に遺憾に想はざるを得ないのであつた。詰り諸君の見聞慾がそれだけにまだ發達してゐないのであるが、これ又多く聞くと共に自から聞かんとする慾求を生ずるのである。

□農業上の發明が肝要

現代の世界に於ける物質文明は吾々人類の生活上に種々なる便益を齎した。一面甚だ感心出來得ない弊害などもあるのはあるが、大體に於いて先づ人類の生活上に大なる利便と有益とを與へたのである。就中その中でも尤も持年に價するもの

は、化學工藝上の種々なる發明發見である。その物質文明の恩澤に浴して我國の如きも前に述べたごとく種々なる生活上の變化を來した。一寸出るとしてもテクツテ許りゐる必要は無い、人力車もあれば自轉車もある、自動車もあれば汽車や電車までもある。着物などでもさうだ、三越などから取寄せると何處の國の産出のものでも直ぐに金さへあれば着ることも出来る。また冠るものでも穿くものでも、或は大工が家を建てる上に、或は人と人とお互ひに話しをする上に、或は、日中と夜るとを同じ様な明るくする上に、其他ありとあらゆる凡ての生活上に斯くまで便益を齎したのである。

が一度我農村——農業——農民さうしたことの上に何れだけの利便と有益とを齎してゐるかと考察して見ると、眞に悲しまざるを得ない次第である。然し米國の大農場などへ行くと、可なりに機械力などを利用してゐると云ふことではあるが、我國現在の農業上の状態に思ひ及ぶと、實に悲しく哀れむ可きものである。勿論それ

は尠しも無い譯では無い、例へば、電力を利用して新たに整理し開耕した可なりの廣い水田に水を供給してゐるとか、少しのもので澤山の肥料素を含有してゐる肥料が出来たと云ふ様に、少しは農業上などにも物質文明の恩恵も與へられてはゐる。然もそれが實に情けない程度の僅少なものである。

従つて、我農業の生産力は他の工業上などの様に大發展を來してゐ無い、また其産出物が安價に出来ること云ふことになつてゐ無い。農村問題の根本である農業では飯が喰はれぬとか、農業は割に合はぬとか云ふことに、此の物質文明の恩恵の僅少と云ふことが大なる關係を持つてゐることは勿論であり、それと同時に、我農村の時代遅れであること云ふことを語つてゐる一面であるとも云はれるのである。

單に人間一個人の勞力で造り出すとなると三日も四日もかゝるものであつても、それが機械力の應用でやると、ほんの僅かな時間で出来る。また其機械力そのものが化學工業の應用などで至つて安價に供給される。従つて同一物を作り出して、そ

れを販賣するとしても、人間の手足で一寸の道具位使用して作ったものよりはすつと安價に賣ることが出来る。それで尙多くの利益を得ることが出来ると云ふものになつてゐる。ところが農業にはそれが實に少ない。五十年前に一俵の米を獲る爲めに費してゐた我農民の勞力と、今日の農民の同じ一俵を取る爲めに費すところの勞力とは、ほんの僅かな差異を見るに過ぎぬのである。従つて同一人數で多くの物品を製出することの出來得る様に進歩してゐる工業などに比べると、實に／＼哀れな程度のものとなつてゐるのである。だから我農民は何時までも五俵なら五俵の米を得ることしか出來無い、依つてビーク／＼泣言を云つてゐなければならぬと云ふ次第であるとも云はれる。

□農村青年の大奮發を要す

斯様な次第であるから我農村には是非共農業上の發明や發見が特に肝要なのであ

る。我農村青年諸君は大奮發をして、我農業上に使用する機械器具其他の大發見大發明に盡力され度ひ。

然し發明とか、發見とか云ふことは、中々容易のことでは無い、事に依つては三年が五年、或は十年二十年が一生懸りきりにかゝつてゐても、遂に其目的を達し得ないことなども随分とある。けれどそれは我農村の青年——就中喰ふことですら満足にすることの六ヶ敷いと云ふ我農村の多くの農民に向つて、そうした容易で無い大發明大發見をせよと云ふてはそれは注文する方が無理である。余の云ふ處の發明とか發見とか云ふのはそう云ふ大發明や、大發見許りを云ふのでは無い。資力の充分にある一部の人間などであつたならば行れる者には是非やつては貰ひ度ひ、そして世界の農民の利益を謀つて貰ひ度ひのは山々であるが、それよりも先づ一般の人々に、手近な一寸出來る様な發明發見をどし／＼やつて貰ひ度ひと思ふのである。例へば、我農村では最も多く稻の蒔入れの時と、また最初の植付とに於いて多忙

を極めてゐる。また其爲め我農民が或程度以上の多くの耕作を爲すことが出来ない
 これでは困るから、其の植付けや蒔入れを一種の機械力でも利用して人間としては
 五人も十人もかゝるところを、それに依つて一日に一人にでも行なうことが出来る様
 に工夫する。——恁ふ云うことなら恁ふ云ふことに就いて、先づ少し宛なりとも、
 その目的に叶ふと云ふ様な機械や器具の發明に力を注いで貫ひ度ひのである。此の
 點に就いては、世界中でも特に我農民は眠つてゐると云ふ有様である。實に哀れま
 ざるを得ないと思ふ。

「希望あれば方法あり」と云ふ格言は、苦學する人とか、女をたらす人とか、商業
 とか政治とか、教育や宗教其他のことなどの爲めに許り存する格言では無い。我農
 村の青年諸君の爲めにも充分な意義を有して存在する格言であることを考へて貫は
 ねばならぬ。由來知らしむ可からず主義に一種の壓迫を加へられてゐた我農村の人
 々は、前にも云つた様に、實際智識慾の目を塞がれ抑へられてゐただけに、此の點

に關しても實に振は無かつたことおびただしいのである。
 我農村青年諸君、諸君は大なる勇氣を以つて、此の我農村の物質的發展に勉めて
 貫ひたひのである。又然かくせねばならぬのでは無いか。

余は前きに諸君に對つて農村に存在する凡ての餘力を利用して我農村の内部充實
 を謀るべきことを説いた。斯様にして諸君は大なる時間の餘力を得て、それを大い
 に此の發見や發明の上にも利用し且つ活用して貫ひ度ひのである。

近來我國でも日に種々なる發見や發明も行はれてゐる、それが多くは都會生
 活者、怠けものゝ人々をして益々怠けさせるに都合が良いと云ふもの許りであるが
 中には又國家的な發明などもあり、又直接に我農村の爲めにと云ふ發明や發見など
 もある。が其多くが、一朝農村諸君の我に渡されて使用する場合になると、何うも
 實用向で無い、實利的で無いものが甚だ多い。それと云ふのが、我農村の人々の知
 識がなく苦心が無く、従つて農村の人々の聲を參考として發明發見されたと云ふも

のが至つて少なく、且つ中には實際農村の人々に依つて發見發明されたものがあつても、其發明者發見者の活用的な智識の缺けてゐる爲めなどに依つて、實際役に立たせ様とする場合になると、何うも目的に反すると云ふものなどになると云ふのが少なくないのである。

要するに前記の様なことは、我農村の人々に罪がある。云ふても過言ではあるまい。何故と云ふと、諸君は聲を大きくして注文しないから悪いのである。注文して作つたもので無く「相場ものの股引が足に合はぬ」と云ふのは古來よりの事實では無いか、相場ものの實利的で無く、實用向で無いのは云はずと知れたことである。

□人口問題よりもこれが第一

近來我國に於いては農村などにも人口の増加に依つて勢力の餘力を來し、それが爲めに無駄喰ひをしてゐるものが多くなつて、それで農村の衰微が甚だしいとか、

それだから早く海外發展策を講じなければならぬとか云つて、熾んに農村の人口問題などを引廻したり、振廻したりしてゐる人々があるが、五十年來の物質文明に酔つて浮立つてゐる人々には實に困る。凡てを何でもたゞ大きくするとか、形を直すとか許りやり度がつてゐるが、それは眞に良く無い、そんな醉漢の駄言に近いことよりも、第一に内部充實を充分にやるが良い、また我國の耕作地などにも、甚だ澤山の未耕地があるでは無いか、よしそれが現在の我農業としては、直接經濟的未開耕地で無いとしても余が云ふ此の發見や發明の力に依つて、澤山の勢力上の節約でも出來得たならば、直ぐにもそれが立派な算盤上で割に合ふ經濟的耕地とすること出來得るのでは無いか、人口問題などよりもこれが第一と言ふのは詰り此處にあるのである。

又或者は云ふ、我日本は實に山脈に富んだ平原地の少ない細長い國である、従つて凡てが小規模であるから大仕掛の農業などは出來る筈が無い、だから機械力の應

用などは出来ぬ、と、そんな人物には敢てやつて貰ひ度ひとは思は無い。またやらせ様とした處で何の役にも立たない。そんな無智な奴に強ひて頼む必要が無いのである。人間の力はそれ程少なうものでは無い。また自然は無限な大資産である。空氣中の水蒸氣を左右して、自由に雨を降らせ、自由に晴天にもする、尙澤山の電氣動力などを利用して、何十里何萬町歩と云ふ廣い土地に耕作すると云ふ様な米國式の大農的なことを我此の小島國である日本の土地へ持つて来て、直ちに其まゝ應用し様としたところでそれは出来得ない、そんなことを仕様とするのは、恰度、近年佛國のサハラ大沙漠に地中海の水を引入れて大なる海と化さうとするのを聞いて、イヤ日本でもそれなら北海道や樺太を陸で續け、また朝鮮も山陰山陽の陸に續けて了つて、日本海の水を太平洋に全部出して、大なる凹地の陸地にするがよい。と恚う云ふ様なもので、到底現在の人力としては、日本海を陸地にすることが出来得ないと同様、米國式の大農的に日本現在の農村をすることはこれ又出来得ないのである。

要するに臨機應變、土地とし、事業として適切なるものであつたならば、それが何んな小発見、小發明の様なことであつても良いのである。少ないものゝ我農村も五百萬餘戸である。一戸に一俵の増獲を得ることが出来たならば、既にそれが五百萬餘俵の増收ではないか、兎に角、我農村には未だ大なる發明や發見の餘地がある。我農村青年諸君は、眞に大いに自己を愛せんとするならば、一時一分の時間たりとも忘るゝこと無く、此の農業上に活用すべき發見、發明の上に、全勢力を傾注して、將來我日本農村の世界に唱はるゝを樂しみに、其處に向つて進み、其事に對して勉められ度ひのである。また然かせねばならぬのである。

農村の根本的急務

□急務は甚だ多い

我が農村青年諸君、諸君の爲すべきことは甚だ多い。諸君の責任の量の多いと共に甚だ多いのである。また其の爲す可きことの中にも急を要する事項も頗る尠くない、殆んど何れから手を付けて良いか一寸迷ふ程の多量なのである。然しそれは第一諸君の位置にもより、住所の如何にも依る。何が尤も急務中の急務であるかを、此處に具體化して説明することは頗る六ヶ敷い問題である。米作を主とするもの、またそれを副とするもの、或は山林よりの産出物を以て、地方農村の生命とするもの——と云ふ状態であり、將た又、諸君が小作農である場合、或は自作農、又は地主の青年である場合と云ふ風で、諸君の位置、諸君の住所の土地の

如何に依つて急務とする處を異にせざるを得ないからである。専門的なものでない本書に於ては、勢ひそれを一々委細に述べることは到底不可能な次第である。従つて此の急務中の急務を撰擇する場合に在つては、たゞ諸君の才識、諸君の常識等に依つて、推理し、断定し、撰擇して實行に出でられることを望むより外無いと云ふのが先づ大體であらうと思ふ。けれども、又一面、如何なる場所、如何なる位置にある諸君にも、共通である可き事項も無い筈は無い。否ある。急務中の急務とも云ふ可きことの大體は諸君の自から撰む處に任ずるものゝ、それでは余としても又満足を得ない。又申譯も無い。さればその二三を揚げ來つて、諸君の参考までに述べることにする。

□他人ごとで無い事を悟れ

病人は何ごとを爲るにも先づ病氣を治さなければならぬ。餓えた者には食を與へ

ることが何よりの急務である。「農業では飯は食はれぬ」と云ふ我農村は前にも云つた通り此の病人である。そして、餓えたるものである。諸君の収入は、諸君の支出に足らぬのである。此の勢ひを以て進んで行けば、諸君の農村は日一日と荒廢して行く。余等が今後何時か諸君の農村を廻る時、至る處に農村の骸骨を目にする様なことであつたならば、余等の感は果して何んなものであらう。彼の英國の故詩人ゴールドスミスと云ふ方は、多年都會の風塵の裡に苦闘を續けてゐたが、故郷懐かしく、或時歸つて見ると、ありし昔の俤は無く、その田園の荒廢、甚だしいのを見て、悲痛の情に堪えなかつた。そして「荒村行」と云ふ詩を作つて、世の人々に訴へたと云ふことであつたが、或は余の如きもゴールド、スミスと同じ様な感慨を味ふ時があるのでなからうかと、農村出身者であり且つは鋤を置いて年未だ久しからざる著者は流石に他人ごとくは思へず、日夜心配に堪えぬ。依つて、未だ我農村青年諸君に向つて、指導の位置に立つ柄では無けれど、遂に云はざるを得ずして本

書に筆を起した様な次第である。吁我農村青年諸君、諸君と雖も一度農村の現状を思ふ時は、必ず一掬の涙無かるべからずであらうと思ふ。諸君よ、諸君も又、我農村の疲弊衰微に對して、何處までも自己の急務と感じ他人ごとく思はるゝこと、奮然起つて我農村の救済に全力を注いで欲しいのである。

現今各地方の實際を観ると、我農村の人々の中には、自己の疲弊困憊のそれを、他人ごとの様に想つて居るらしい人々の多いのに驚く。先づ、村長など云ふ方々に就いて見るに、自からは村の爲めに撰まれたのであると云ふことを心得て居らぬ様子の人々が大部分を占めてゐる。村の爲めに、村民の爲めに、村内の實際を上々の役所などへ傳へるのが自からの職責の大體であるのも知らずか、縣廳や郡役所の人々でも來ると、恐れ入つてたゞ其お役人様の御氣嫌取りに熱中する許り、私財を投じ、或は村財を提供してまでも、お役人その人へ、女や酒でも取持つ位いが關の山で、反對にせずとて良いこと許りをする位だから自から行らなければならぬこ

と、村民の困しいことの實際など少しも語るまい位に行つて居られる方が多いと思ふ。少しも恐れる必要も無いお役人其者へ對して、何もお氣嫌をとる必要は無いでは無いか。村長と云ふ村民を代表する自からは、敢て其等のお役人様から撰擧されて名譽職に上つたのではないのである。それであるのに、其お役人様にはお氣嫌取りに苦心してゐる。其位いであるから、後になると「イヤ今度お上からこれ〜だ皆然うしなければならぬ」なんつて、何でも彼でも、其お役人からの傳へることは、命令位に想つてゐる。少し上のお役人へ對して既に其位のであるから、平常の行爲もまた驚く可き事實が多い。他の吏員の人々も、成可く遊び朋友として都合の良い様な人物を集めて置いて、「オイ誰さん此の頃橋本屋へ来た酌婦は中々好いちやアないか、また今夜邊り皆なして乗込まうよ」など、云ふ調子で賣春婦の批評でもやり乍ら戀愛小説でも讀んでゐると云ふ様な人々も、可なり多數在ることを、余は各地漫遊中に於いて見聞したのであつた。噫、村民に撰ばれて起ち、村民を代

表し、村民の爲めに存する尤も一村の死活に對して重大なる責任を持つ村長其人が、斯くも民の爲めを想はず、村の死活問題も他外ごとに見て、反つて村民全體に遊惰を示し、惡風を起さす原動力となる様なことを爲しつゝあるとは、何と歎かはい次第ではあるまいか、實に言語道斷の極であると評しても、尙辭のやさしきに過ぎるのを想ふのである。

□起て我農村青年諸君

讀者諸君の住所には前記の様な村長さんなどの居らぬとすれば、それは頗る嬉ばしいことであるが、余の觀るところを以てすれば、十中の八九は、前記の様な、遊ぶことや惰ること、我農村の困難を他外ごと視してゐる——それ等のことを我農村の諸君に向つて示してゐる人々の居る土地であることを想ふて轉た慨嘆に堪えないのである。

然し述べ來つた如く、お役人の御氣嫌取り、或は賣春婦を好むこと、又は遊ぶこと、それ等のことは必ずしも悪いと許りは云はぬ。人間には自然に與へられたる性慾もある。食慾もある。惰性もある。それを全然押へ付けなければならぬとは余は敢て云はぬ。固苦しい伯父さんの意見が、常に若い息子たちには一時的の東風となる位のことでは余も既に識る。人間は常に快樂を求めて止まぬのはこれ正に自然性であり、また常に樂を知らぬ人の働き得ないことをも識る。尙一步深く云へば、「後悔せざる者は樂みを知らず」と云ふ西洋の諺までも識らぬ譯ではない。人間は大いに樂む可しではある。然し前記の様な村長さんたち等の多くは常にそれに溺れてゐるのである。従つて、彼等は決して爲す可きことを爲してゐない。爲す可き幾多の事項を顧慮せずして絶えず下劣なる私情を満たし快樂を貪らんとしつゝあるのである。

吁、此の惡風、我が農村の弱點をして益々擴大させつゝある弊風、甚だしい不完

全なる自治の當事者、これを破り、これを止めて、健全なる自治の本領を發揮し、現在の欠點多き我農村をして、充實せる農村となし、他日大言壯語して自己を他に語らんとするには如何にせば其尤も最善且つ最良のものであらうか、またその破壊と建設、改善は何人の手に待つ可きであらうか、云ふまでも無く、正にこれ我農村青年諸君の急々奮起して其局に當る可きものであらねばならぬ。

諸君も既に知らるゝ如く、我國明治維新の大業を成した中心人物は何人であつたか、云ふまでも無く、活潑々智たる青年諸君では無いか、橋本左内、頼三樹三郎、梅田源次郎、藤森弘庵、日下部伊三郎其他の悲しむ可き犠牲者も出したのは出したものゝ、西郷、木戸、伊藤、大久保、山口等の人々に依つて大體彼の大業を爲し得たので、それが然かも、悉く二十何才の青年連に依つて爲されたのでは無いか、我農村の改善に、また余が先づ起てよ我農村青年諸君と叫ぶのも當然のことであらうと思ふ。

「充分の準備が必要」

實際古來から大業を爲し得たものは、青年の力に依つたものが多いことは敢て我國のそれ許りでは無い。一々例を上げる必要も無いから略して置くが、世界各國共に然りであつたのである。それと同時にまた種々なる準備があつたことも共通の事實である。準備とは何であるか、それには種々と場合に依り事に依つて性質に依つて異つてゐるが、第一に皆共同一致良くことに當つたことなどは否む可からざる事實である。

武士道の華と歌はれてゐる義士のそれを見給へ、四十七士の心が皆同一に好く一致してゐたからことを爲し得たのである。近年東京などで度々催される國民大會とか、又各地で間々ある市民大會の如きものは何うであるか、集まつた者必ずしも一致した心持を有してゐないから、多數の割に何時も一々碌々事を爲し得ないでは無

いか、また今日の戦争でも然うだ。聯合國の軍隊が、各國の人々を集めたのである爲めに、何處か一致を欠くところなどのある爲めに、案外一ヶ國や二ヶ國の獨逸軍を破ることに成功を収め得ないので無いか、また偶々一二軍位の大なる成功を爲し得ると云ふのは、歩工砲其他の全軍が好く一致してことを爲し得るからである。事を成さんとする準備として一致の必要であることは云ふまでも無いことであるからこれ位で止めて置かう。

次ぎには、破壊者はまた勢ひ建設者たる可き實力を有してゐなければならぬ。明智光秀の天下を取つた様ではならない。そんなことなら寧ろ取らぬ方が餘程益しである。それには余が先きに時代と青年青年の項に述べて置いた様に、充分なる常識を養ひ、健全なる思想を有して事々に明々白々として推理し、断定し、處理し得らるる半斷方などを持つてゐなければならぬ。これ等も輕視すべからざる準備の一とつである。

まだく準備は種々である。然し要するに、諸君にして充分の事理を解し、事物を處理し得るの明さにあらば、それ等は自から自明の事に屬するのであるから他は略すこととして、次に一とつのはいい實例を引いて参考に供することとする。

□覺めたる青年が活動の實例

前に農村研究の爲めに旅行したことの一度も無かつた余は、日本全國の大半以上を踏査したもの、農村に就いての多くの調べた材料を持たない。また僅かある材料も不幸今手元に存在するものとして、僅かに昨年の旅行に得たるもの而已であるが、其中尤も、此處に引例して適當なものと思はるゝものゝ一とつを次に載せることとする。

本邦中尤も凡てに遅れてゐると云ふ東北の野にも、憊うした模範とす可き實例がある。場所は岩手縣の中部、東北本線の一驛の所在する黒澤尻町である。有名な大

鑛山の澤山ある澤内地方、また其處を経て秋田縣横手に通ずる横手街道の入口に在る人口一萬近い町であるから純な農村では無いが、同地の青年會が「自治の完備を期す」と云ふ目的の下に起されてあるだけに、相應なる効績を收めてゐることは事實であつた。伊藤治平と云ふ會長は、如何なる人物であつたか直接には識らぬが、余の逢つた理想閣と云ふ書店を經營してゐる阿部喜兵衛氏(同會幹事四名中の一人)其他の人々の談に依ると、財産あり、地位あり、名望共に徳高き人物とのことであつた。全會員は廿八名であるが、人物本位であつて年齢の如きも殆んど制限を付して無く、また財産の如きには無一文の者などもあるとのことであつた。従つて會の費用などの資金も會費何程として同一に出す様なことをせず、會員中有志者の特志に依つて出資してゐると云はれた。

斯様な次第で、情義と理性とを以て團結した團體の人々である爲めに、決して曲事を議決し、無駄を論ずる様な事等はしない。従つて目的とする「自治」と云ふ上

に就いても、大なる勢力を町民一般が充分認めてゐる。其爲め例へ町會に於て一段可決された事であつても、其青年會に於いて不可と爲す時は、町會の可決は全然ゼロに了ると云ふ有様で、町の爲めを謀り、町に於ける「自治の完備」と云ふことは、去る明治四十一年同會創立以來、着々として好成績を収めてゐると云ふことであつた。

委しいことは略して置くが、心ある青年諸君の、大いに味ふ可き事實であると思ふ。

□自治の完成を謀れ

我農村青年としての急務としては、個人的には第一先づ各個人の自覺、また其充實とであるが、それは既に述べ來つたことであつて、此處には今團結としての急務中の急務自治と云ふ名の下に、諸君が支配する上に説き進めて來たのであるが、

既に述べ來つたごとく、此の、自治の完成と云ふことは、中々重要問題である。

我農村青年諸君が、各不要なる真似事を止め、農民としての本領を佳く發揮して事理を解し、事物を處理する實力を備へて一致團結自治の改善を遂行し様としたならば、必ず其處に立派なる村本意の自治の華を咲かせ、實を結ばせることが出来るのである。

覺めたる諸君青年が、聲を大きくして自治の完全を叫んだならば、如何なる頑固な當事者であらうとも、正義の軍に敵し得ずして忽ちにして白旗をかゝげて諸君の前に降り、直ちに城を開け渡すであらう。よしまた開け渡さぬまでも、前記の實例のその様に必定、諸君が翻す正義の旗風に逆ふ様なことは出来得ないのである。

斯くて村民の爲めに存在する村長其人も眞の村長としての効を積むであらう。三百戸や四百戸の小村で、七八人の吏員が遊び半分に事務を執る様なことも無く、滋賀縣下の一地方其他の様に、五六百戸以上の大村であつても、二人か三人の敏腕家

を以て眞面目に有益に有利に事務を通んで行くであらう、また諸君の實際の苦衷は郡役所、或は縣廳より以上の爲政者其他にも充分通じて呉れるであらう、女や酒に遊ぶことも、眞面目と多忙とに依つて勢ひ中止されるであらう、と共に、現在各地村役場附近に多くある曖昧料理屋も、摺れ枯らしの賣春婦などは置くことを止めて諸君が勞を慰する晩酌の小買ひ或は休日の清遊を快く迎へられて、清く樂しき不安なき慰藉を與へらるゝであらう、またこれに依つて全村民の風儀は善化し、後に來る少年青年までも期せずして立派なる世界の日本農民と成らるゝことであらう。

我農村青年諸君、諸君にして自治の完成を謀るに斯くの如く爲されたならば、成果は又斯くの如きは當然であつて、其處には完備せる樂園の生み出され、彼のヘブライ民族の傳説中にある人間がまたエデンの天國に住まつて、其の樂園に嬉々としてゐた時代の有様を其處に現出することが出來得るのである。これ農村の根本的急務である。

農村青年諸君「天は自から助くる者を助く」と、諸君奮勵一番、以て地上に天國の現出を構成すべく勉む可きではあるまいか。

□宗教に依る飛驒の模範村

既に自治と農村青年と云ふ様なことは大略を終つたのであるが、尙此處に一つの特殊なる飛驒に見たりし模範村の實情を、余が思出の細き糸を操つて參考までに諸君に紹介することに致さう。

近來政府當局乃至縣廳邊りから表彰されてゐる模範なるものは各地に散在してゐるが、余等が見る處としては、これが完全な模範村だと思はるゝ様な場所は、何うしてもそれ等の中からは殆んど見出すことが出來なかつた。勿論それには余の寡聞の致す處ではあらうけれど、實際余が實觀せる其等の村々は前記の如き感想の外浮ばなかつたのであり又現に然うした氣分以外余の頭腦には殘されて無いのである。

其模範と稱するもの、多くは、物質文明の恩澤に浴して、其處に何か特別な工業でも起され、其爲め財政上の模範となつた爲めに表彰されたとか、乃至は一人の特別な善良で有力な中心人物の出来して、其人物の活動に依つて、比較的財的に、又道徳上なども模範とす可きものとなつて表彰さるゝに至つたとか云ふのが普通であるが、余の此處に紹介せんとするのは斯かる性質のものでは無い、一種特別な宗教の力に依つて構成されたとも云ふ可きもので、衣食禮節並び長じたと云ふものであつた。

本島中部としては未だ此處だけは少しの鐵道だに通じてゐない飛驒國の山中、其都市である高山から東北に續いた山村に大八賀村と云ふのが有る。戸數は一寸四百戸許りの小村と記憶してゐる。余が同地を訪ふたのは去る明治四十四年五月十一日のことであつた。高山の町端れから長坂と云ふ小山を越えて其村の部落近く進んだ時は、恰度十二時近い時であつた、農村の道路とは思はれぬ程清潔にされてゐる細

路を行くと、中食の爲めに住家に歸るのでもあらう、鐵を樹蔭に置いて老幼打連れ樂し相に語り乍ら畑を出て行く人々がある。また五六人の家族が、畑の畔の藪に腰を下して休息んでゐる其人々の談し合つてゐるところを聞くと「ア、そうくくく……南無阿彌陀佛く」などと云ふ聲も聞かれた。やがて道路の交叉した四方辻の處へ出ると、其處には村の案内標が立つてゐた。三尺許りの巾の板で、一間許りの長いのが二本足で小高く建てられてゐる。それに村の位置や人口の様な事から初めて山林が何れだけ、田畑が何程、村民一人宛の平均耕作地とか収入の様な事柄までも書いてあつた。そして、下の方であつたか、或は一方の横であつたかに、村の略圖も書かれてゐたと思ふ。(此れらの事は或は差違の點があるかも知れぬが)兎に角一寸見ただけで、眞に大八賀と云ふ村の全體が包む所無く示されてゐた様に記憶してゐる。

次第に村の中心の方に迎ると、民家も漸次數を増して餘程集まつてゐる處へ出た。

が何處を見ても殆んど一軒の駄菓子を商ふ様な家さへ見えない。其中に余が求め様とする賣る家だけはあつた。それは、普通の農家であつて、道路に面した一室を店にして、其處に一人の老母が居たのであつたと思ふ。また、青年會の催しである種々な作物の試作場などが一二ヶ所見えた。よく／＼の老人が四五才の兒女と遊び、遊ばせてゐたのは見たが、遂に一人の壯者の遊んで居るものも余の目には入らなかつた。余は常に何ごとにも出來得る限りの注意を拂つてゐたので、此の時、一種特別な感じに打たれたのであつた。それは、何う云ふものか、農村に珍らしい種々のことが余の耳目に映じたからであつた。此の地方としては、そうした村の案内の様なもの、此當時はまだ他に餘り見られなかつた。またこれだけに空地や荒地の無い所も無く、これだけに遊人などの居らぬ様な土地も無く、これだけに凡てが清淨にされてゐた處も無く、作物の手入なども、此の村程好く行届いてゐる處が他に少なかつたと云ふ風な次第で、農村の充實が可なりにされてあつて、然かも農

村として不必要なものが殆んど見られなかつたと云ふ處からであつた。然し、これ許りでは無い、余は村役場に訪れた後、愈特に此の感を深うしたのであつた。實は余は其土地／＼へ行く場合に、何う云ふ場合でも、全然然うと云ふ譯では無いが、成るべくは其土地を全部好く識つて行くか、さなくば、少しも知らずに行くこと云ふ方法を取つてゐた。何故と云ふと、好い加減に其土地其物を識つたと云ふ場合は、實際にこれに接觸する時になると、必ず一種の色眼鏡をかけたものになつてゐる。赤い色眼鏡をかけて見ると、赤く見えるのは當然だ。それではいかぬ、と云ふので、土地々々の人情風俗など見るに就いても、成るべくは全部を好く識ると云ふことの不可能なことを想つて、少しも知ら無いで行つて、直感すると云ふ主義であつたので、此の大八賀村へ行つた節も、矢張それであつたから、大八賀と云ふ村が縣の模範村であると云ふことすら、少しも余は識らないで訪れることになつたのであつた。

役場を訪ふと、其時は村長と云ふ方は居られないで、助役さん其他の人々と接したのであつたが、余は一種の商人——と云ふ假面を冠つてゐて、訪ねてから暫時の後、

「此の村は大層好い村と云ふお話しで御座いますが、何か私たちにでもお話しでも御座いますまいか？」
 恚う云ふ句調で質問を續けて見ると、

「イエ別にお話し申す様なこともありません。模範村だなど、云つて下さいませけれど、何もそれ程のことも無いのです。強ひて申上げましたならば、たい村民一同が、皆好く自分の立場を識つて働いて呉れるものですから、勢ひ幾分か財政上にも樂ですし、従つて幸ひ悪人など云ふものも出ませんのです。小學校の先生も良く訓へて呉れます。お寺の和尚さんも真に佳く説いて下さいます。老人も青年も遊ばずに働いて呉れます。皆な村の爲めに好く勉めて呉れますから、私たちの様なものま

でも遂勵まされてぐづ／＼しては居られません。イエ其お目にかける様な書類などは少しもありません。賞状などであつても、まだ私たちは人に示す程の者で無いと思つて居りますから、遂額にして揚げて置きません云々……」と云ふ次第で、余が最後には純な商人で無いことまでも明して、種々と尋ねたのでしたけれど、斯様な状態でしたから、少しも誇る様などころなどは見えす、たゞ事實の上で模範たる處を示されて居られたのでありました。

形式の時代である、肩書の時世であると云つて、何でも彼でも形の上、外見の上に許り力を注いで、少し上のお役人でも來ると、エ、これは斯うなつて居ます。これも此の通り調査して、斯う云ふ方法を取つてゐます。あれは何う、これは斯うと全然見えや形而上の模範許りを作らうとしてゐる現今の時代に當つて、恚うした實質上の模範村を見ることが出来得たと云ふことは、當時の余に取つて、我帝國と云ふことを想ふとき、常ならぬ嬉びの心に満たされたのであつた。

我農村青年諸君、余は甚だ不完全ながらも此處に此の特別なる模範村の骨髄を、諸君に向つて述べ得た心算である。諸君宜敷く熟讀翫味、其眞意を此の事項の中から求め得られたひのである。

□農村信仰の中心を得よ

自活は農村を左右する大問題である。其問題を述べて宗教の力に依つて構成された模範村の實例で結んだ。宗教と云ふ文字は直ちに信仰と云ふ言語を連想する。依つて其次ぎとして此の信仰と云ふことを説いて見よう。

農村の信仰と云ひ、また其中心を捉へよと云ふ、問題は甚だ大である。農の眞理を闡明して、其眞理を信仰する。これも農村信仰の中心を捉へることにも成らう。又それも大に行る可き事である。然し此處には其事は諸君の随意に選擇し、随意に信仰することに任せて、神佛信仰の事柄を述べることにする。

既に述べ來つた如く、現代科學の進歩に伴ふ物質文明の勢力は、遂に吾人を類の生活形式に大變動を與へた。従つて精神方面にも多くの動搖を齎したことは云ふまでも無い。就中、神佛に對する信仰心等の如き、甚だしい影響を蒙つたのである。其現象として寺院の荒廢の如きも甚だ多い。各神社佛閣への賽錢に至るまで、一般の生活程度昂上の數字に正比例しては居らぬ。多くの者は神佛へ對する敬意表象すら餘りに爲さぬと云ふ有様となつた。甚だしいに至つては、神佛へ對する敬意を表する其事を以て、現代人の恥辱と心得てゐると云ふ馬鹿者までも生じたのである。これは我國民一般の大勢である。何うして農村の人々許り、其大勢に反抗することが出来やう。無智にして何事にも盲信し盲従しつゝあつた我農民は、反抗どころのことでは無い。何でも彼でも模倣する我農村青年の如きは、驚く可き勢ひを以て、また此の精神上の眞似まで行つてゐる。よし敬意を表する者としても、それは眞の敬意を表するのでは無い。軽い敬意の表示、乃至は、薄い偽りの敬意であるか、ま

たは一種の神佛へ對する恐怖心の發作として「あゝ神様佛様へ對して敬意を表すことをせなかつたならば、罰を與へられはすまいか」など、云ふ懸念を以て敬意を表してゐると云ふものが甚だ多い。余は各地に於いて我農村青年の信仰心如何を叩いて、其言辭に驚かざるを得なかつた多くの經驗を有してゐる。又近來は相應に各小學校教育などに於いても、神佛崇拜と云ふことに關して重きを置いて居る様であるから、眞逆に斯かることもあるまいと思ふが、現に十餘年前、余が未だ生徒として小學校に在つた當時などは余が郷里の小學校の如き、一時甚だしい馬鹿者の校長が居つて（クリスト信者であつたが）小學校の後ろに在る鎮守の八幡神社に對して生徒が毎朝登校の節、禮拜を行ふのを見て「御前たちはこんな事をする必要は無い、それよりも寧ろ男生は女生徒に向つて禮拜をするが良い。女生はまた男生に向つて禮拜を實行するがよい。アンな八幡様などへ禮拜してなんになる、云々」と、愾うした暴言を吐いて余が郷村農民の大切なる兒童に、甚だしく神佛信仰心の破壊を起

させた者などもあつた。

斯様な次第であるから何うして我農民の神佛信仰心に大なる影響を及ぼさずして止まらうぞ途には大なる變化を來さしめたのである。で其結果は何うか、云ふまでも無く前記の様に信仰心は薄弱となり、延いては農村人士の精神を攪亂させ、道義の念を去り、薄情落、我農民は遂に其根本的一種の倚りどころを失ふに至つたのである。噫何と慨かほしい事では無いか、悲しむ可きの極みである。

□神佛とは何か

余は宗教家で無い。また専門家で無い。只一介の農民とも稱す可きものである。斯かる余が此處に斯かる題目の下に説かうとする、既に其事が誤つて居るかも知れぬ。また其説くところの淺薄にして價值無きものたるは余も既に期するところである。然しながら云はざるを得ずして余は此處にこれを云ふのである。これ又我農村

の充實を謀り、世界に日本農村の善美を成す上に効驗せんとする余の熱意に出づるところである。讀者諸君、諸君は余が此の熱心なる誠意を汲み、以て其欠點を見ること無く、其善にして美なる所を解せらるゝ様勉められたひのである。

人は目的地に赴かんとする時、其目的地への里程の幾許なるかを尋ねる。ましてや目的地の定まらざる人類の生活行路に於いておやである。「汝は何をして何う云ふ風に生活し、何時になれば呼んでやるから其時は歸つて來い」などと云はれず、方向も教へられず、里程も語られず、期間も示されず、目的も訓へられずして「何處へなり、何う云ふ風でなり、何をしても勝手に往つて來るが良い」と云はれぬ許りに宛も無く、自然の懷から投げ出されて來る人間が、何うして目的地や、里程や目的を尋ねずして居られやう、居られる筈が無い。迷ひ迷ふて我行く可き道を尋ね辿るべき里程を問ひ、目的を探してゐる。思想に依り、考案に依り、凡ての科學に依つて種々状々に檢究してゐる。けれども、夢の世の中は依然として夢の世の中で

ある。凡ての研究は益々人類を不可解の山路に導いて行く。如何に科學が進歩しても少しも効が無い。否効が無い許りでなく十八九世紀時代より現代に至つて益々一面人類の自力なるを悟らせるに至つた。研究すればする程此の自然の懷には人類に到底解き盡せぬ多くの謎の藏されてゐることを發見した。

五尺六尺の小軀を持ち、五十年百年の短時間以上生命を有してゐない人間には、到底此の宇宙の大寶庫の内部を隈なく探見し盡すことは出來得ない。子々孫々相次いでゐても、それは、父母の子であると云ふよりも、自然の子であると云ふ可きものである故に、又更めて凡てを最初から見聞して行かなければならぬ。従つて何時までも不可解は殆んど不可解である。全部を探見することは出來ぬのである。此處に於いて人類は人間以上の或ものを認める。それを名付けて神と呼び佛と稱するに至つた。明治神社と崇め、乃木神社と祭ると云ふも、又同じく、明治天皇逝き給ひ乃木大將去つて此の人類界に居ない。自然の懷に歸つた。最早既に人類の直接接す

ることの出来得ない、幽冥界に入られた。爲めに神と祭り、神と崇め奉るのであるとも云へるであらう。

釋尊は大なる信仰を得て衆世に其信仰を誘め、其説を説いた。それは遂に現在の佛教を作つた。キリストもまた大なる自己の信仰を世人に説いて其信仰を促した。それはキリスト教となつてゐる。其他マホメットと云ひ天理教の教祖と云ひ其他凡ての教祖は皆釋尊キリストの如くして世人に信仰の必要を説き、信仰を誘めた。依つて現在にも又將來にも多數の人々から神と呼ばれ佛と稱へられて崇め奉られるのである。又我國八百萬の神々と云ふも、これ又別に豫言者とし教祖として其教へを説くことをせずとも、生存中の言行は世人に信仰の敬意を起さするに依つて各々神々として崇め奉られてゐるのである。我國の文字で云へば、神とは「示し申す」である。善因善果、惡因惡果を説き又示し申してゐる。凡ての神佛は、よし豫言者となり教祖となつて、其教へを自から説いた者許りで無いとしても、生存中の言行が

申し(即ち説き)示してゐる。又無言の中に示し申してゐるとも云はるのである。凡てを理窟詰めにしやうとする現代青年の爲めに、止むなく此の筆を執りし余は此處に此の筆を擱く。

□神佛の崇拜すべき理由

前説の最後に云つた如く、現代青年は凡てを理窟詰めに仕様とする。従つて神佛とは何であるかを説いただけでは、まだ我農村青年諸君も、その神佛へ對して崇拜すべき理由を求めて止まないことと思ふて特に此の一説を述べるのである。

凡ての豫言者、凡ての教祖であつた人々の主意は、必ず此の人類の生存生活に効驗し、後に來るべき人間の幸福を増進せんが爲めに當時の人々から何れ程激しい批難を受け、攻撃を與へられ排斥を迫られ様とも、そんなことは意とすることも無く只々一意専心來るべき人類の幸福増進の爲めに身命を賭して盡された方々である。